

自然の實相や人生の歸趣はとても限りある人間の智慧を以てしては到底會釋されるものでない。

随つて宗教上の安心は、それ等の智慧の沙汰をはなれて、人格の中樞が美事に充實される所にある、充實の程度は即ち安心の程度である。

宗教的眞理は人格充實の勢力の意味で普通にいふ智識上の眞理ではない、充實の力の大なるものが、即ち宗教上の眞理である。

斯う云ふ意味でわれ／＼は客觀の眞理や事實よりも主觀の自由や安心や充實を要求する、高義に謂ふ主觀の満足がわれ／＼人間最高の要求である、宗教上の安心は此の主觀の満足を意味するに外ならないと言ふのである。

是は假に宗教上の要求に例を籍りたに過ぎぬが、結局此の二種類の要求は一つに調和せらる可きものであらう。

けれども現代の人間にはこの二種類が意地わるく離れ／＼となつてゐて、どうしでもしつくり調和しない所がある、妙に互に矛盾する要求のために苦しめられてゐるかの感がしないでもない。

二 よりよき生活

普通の生活にも同じやうな感じがある。

よりよく生活したいと云ふのが實際の根本的要求である、本來を言へば此の要求はわれ／＼にとつては全一に調和された要求でなければならぬ、然るに實際はそれが全的に感ぜられてゐない。

科學的空氣の中に育ち、事實や眞實に著しく敏感になつた現代人はすべてが事實に合し眞實に一致することを熱望する。

夢幻や空想や不自然は今代人の敵である、一般に此の傾向に支配されて全的要求は一種の特色を帯びてゐる。

われ／＼は眞實の生活がしたい、事實に合した間違ひのない生活を送りたい、自然の人性に相應した生活が欲しい、自然性を矯めた虚偽の生活ほど賤しいものはない、事實を離れた空想的な生活ほど空虚なものはない、事實を離れることはすべてに於て空虚夢幻を意味する。

我々は得難い一生を夢にしたくない、シツクリ事實に符合し自然法に一致した眞實の自覺的生活に入りたいと云ふ要求が、普通の淺薄な意味の主智的とか理性的とか云ふ形容を許さないものであることは言ふ迄もない。

まして智識一邊の好事的な要求ではない、正當と言へばそれが切實な要求である限り深く情意に根底を置き、其の本質も極めて複雑多岐で容易に一定の形容や解釋をゆるさない。

けれども此の種類の要求が飽くまで眞實な生活が欲しい、事實に一致した生活が欲しいと云ふ點をその著しい特質としてゐる限り、而して顯著な特質だけを強い

て形容しやうとすれば、高義に於て之を理性的と解釋するは止を得ない、情意的な要求中、眞實といふ一面に重きを置いた一種の實際的要求の意味に外ならない、斯ういふ要求が、もはや過去つた前代の要求だなどとは餘りに輕卒な判斷だ、現にわれ／＼の血管の中に餘りに強すぎる程躍りめぐつてゐる活きた要求ではないか、われ／＼は寧ろ此の要求の強すぎるために苦しんでゐるではないか。

此の意味の理性的要求は、全的要求中的一部分にしか過ぎない、われ／＼には別種の強い要求がある。

よりよく生活したい、價値の高い生活が欲しいと云ふことは單に自然で且つ眞實な生活が欲しいと云ふことの外に、のび／＼とした自由な生活が欲しい、活き／＼した元氣にみちた生活が欲しい、深い徹底した底びかりのする生活が欲しい、死すとも恨みなしと感嘆し得られるやうな經驗を味はひたい、あはれに美しくしいやさしい生活も欲しい、恍惚として我を忘れるやうな生活も欲しいと一々數へ切れないやう

な複雑な要求をふくんでゐるのである。

出来るならば、自然でかつ眞實であつて同時に、富贍で深刻で、自由で美しいやうな生活が欲しい。

それが叶はないならば、たとへ事實や法則は如何あらうとも、事實や眞理畢竟何ものぞ。

本來が生活のための事實や眞理ではないか、生活方便として、人間が拵へ出した道具ではないか、自分の造つた道具に支配されるやうな生活をしたくない、われわれはたゞ充實した生活を送れば、たとへそれが夢と言はれやうが、何と言はれやうが、自分に絶対の安心さへあれば死んでも憾みがないと、斯ういふ風な複雑な要求が人間に本來的であることも拒まれない。

主智的な現代は甚しく此の種類の要求を弱めて、人間をせましく窮屈に考へさせる傾きが強いが、然も此の種類の要求は到底人間に固有な本來的要求である。これを前の理性的要求と區別して、假に情的要求と名づけてもよろしいと思ふ。

三 内生活の欲求

われ々の内的生活には、以上述べたやうな二種類の要求が雜然又混然として並び起つてゐる。

本來を言へば前の理性的要求は後の情的要求の中に調和されればならぬものであつて、情的とは言ふものゝ實は理と情とをかねた人間内部生活の全的要求であると言つてもよい。

然も科學的空氣に育てられた現代の人にとつては、前の種類の要求が非常に強い現に此の種類の要求のみが人間唯一の要求と考へてゐる人も澤山ある。全的要求が分列して其の間にシツクリした調和がない、雜然又混沌として起り來る不調和な要求に對して、われ々は其の取捨選擇に迷つてゐる、内的生活はこれ

がために益々動搖する。此の動搖をしづめるためには須からくわれ／＼は全的要求に着眼しなければならぬ、即ち理智的要求を調和したところの情的要求に就て考へねばならぬ。

文藝上のナチュラリズムは恰かも近代の傾向を代表し、ロマンチズムは感情的要求を意味してゐる。

と言つてこれはナチュラリズムやロマンチズム全體の説明ではない、單に複雑な是等のイズムのチビカルなエッセンシアルな部面を人間精神の要求といふ一面から觀測したものに過ぎない。

今日の思想や文藝を假にロマンチックなナチュラリスチックな混沌として複雑なものであるとすれば、それは以上述べたやうな内的生活の混沌として不調和な動搖に相應する今日の人間思想は單に理智的のみでは解釋はできぬ、須からく情的に見なければならぬ。

四 生活の情味

生活の情的要求とは、生活を味はふことだとも言へる、生活を味はずしては人間に生活はない。

人間の幸不幸と云ふことは一面から言へば生活を味はふか否かに存する、貧富貴賤は問題ではない。

如何に金があつても如何に高位高官であつても、生活を味はふことを知らぬものは本當の幸福を味はふことは出来ない。

生活の情味とは何であるか、又その情味は生活にどんな關係があるか、茫漠たる問題ではあるけれども、われ／＼人間にとつては多大の興味がある。

生活の情味、又は單に生活の味はひと言へば、言ふまでもなく生活そのものを噛みしめて味はつた吾人の情の上の經驗を意味する、生活の範圍は廣い、その内容は

極めて複雑である。

生活の情味は多種多様にして又極めて複雑なるべきは自然である、特殊の情味に就てはしばらく是を不問に附して、たとへば吾人が平生感興を惹く度合の比較的強く深く長く、且つ比較的複雑にして、たとへば精確に生活全體の情味と總稱し得ないまでも少くともその情味中の重要なもの、顯著なるもの、情味中の情味とも感ぜられるものに就て、その色合を何と形容すべきか、その特質を何所に求むべきかについて茲に吟味しやう。

普通には生活の重要な情味が極めて簡単に解釋されてゐる、その複雑な情味までが餘りに簡単に形容されてゐる。

一面に於て生活は楽しい、面白い、愉快なものである、スキートなものであると解釋されてゐるが、他の一面に於ては生活はつらい、苦しい、悲しい、哀れなことがその重要な情味と解釋されてゐる、樂天と厭世とはまさしく此の二方面を語る

ものである。

生活の情味が、或は楽しく面白く、或は又不快苦痛悲哀の調子を帯びてゐるのは言ふまでもない。

さりとて此の種の簡単な言葉で複雑な生活の情味を言ひ現はさうとするのは餘りに大膽な餘りに無理なことではないか。

仔細に論ずるまでもなく、經驗上の事實に徴すれば、生活の重要な情味は極めて複雑である。

その内容は味はへば味はふほど深みがあり、不思議である、濃厚である、艶麗である、壯絶である、悲絶である。

然るに是等複雑な情味を十把一とからげに、或は苦樂、或はおもしろい、おもしろくないと云ふ簡単な形容詞に盡さうとするのは生活の眞意義を盡さるのみか、生活そのものに就ては幾多の誤解を世にひろめる源ではあるまいか。

吾人の日常生活に於てすら其の情味は極めて複雑である。濃厚である。簡單におもしろい苦しいと形容される情味も、仔細に味はへば苦樂以上、面白い、おもしろくない以上、尙さまじく複雑な味はひを含んでゐる。

多くの場合に於ては苦樂の兩調が妙に混交して、苦しいやうな楽しいやうな、然もそれ以上強く吾人の感興を惹く深いこみ入つた味はひが感ぜられる。

たとへば苦しからうが、面白くなからうが、吾人は尙そこに吾人の感興を引くに足る興味を覺える場合はいくらもある。

たとへば月の花やかな夜ひとり郊外を散歩するとする、苦しいと感ずることもあらう、楽しいと感ずることもあらうが、單に苦樂を以て盡す可からざる一種複雑な情味を覺えるのが普通である。

深夜心ゆく友と靜かに來し方行く末を物語ると、われ等はそこに形容すべからざる限りない情味を感ずるものである。

吾人が小説をよみ深く感ずる、實際生活とは多少趣が違つてゐるが吾人は尙小説により人生の複雑な情味を味はふ、斯やうな類例は餘りにクラシカルに、餘りにロマンチックだと難する者もあらうが、嚴格な意義に於て、近代の現實生活の情味——ロマンチックなものとは頗る趣を異にした近代生活の情味は更に明らかに苦樂一邊のものにあらずして、より複雑に、より嚴かに、形容の出來ない一種不思議な味はひをもつてゐる。

世人は動もすれば、近代生活をひとへに苦痛一邊又は悲哀一邊のもの、如く解する、苦痛と悲哀とは近代生活の唯一の情味なるが如く解する、現實生活就中近代の現實生活がロマンチックな一種遊戯に類した輕快な情調を含んだものにあらずして、寧ろ嚴肅な苦痛と悲哀との情調に富んだものであることは、我等もこれを認める。

近代生活が赤裸々な眞面目な生活であるだけ強い深い苦痛、悲哀とに富めること

は何人と雖もこれを是認せざるを得ない事實であらう。

然るにも拘はらず、われ／＼は近代生活は決して單純に苦痛一邊のものにあらずして、苦痛の情調のうちにおのづから一種深刻な、まぢめな、強く鋭どい複雑な情味が深く内在的に籠れるを主張せざるを得ない。

近代生活が赤裸々に眞面目に現實的であるだけ、それだけ、その情實は更にいよいよ深く鋭く更にいよいよ切實に吾人の感興を強める底のものである事を主張せざるを得ない。

吾人が情生活全體を壓倒するほどの激烈な苦痛は別として苦痛の情調の伴ふことは必ずしも吾人の感興を絶滅するものではない。

むしろ倒に強く吾人の感興を惹く情味はおほかた深い苦痛と悲哀とを包んでゐるとも言はれやう、トラシカルな情味はすべて此の種類のものである。

我等は近代生活の情味を如何にして單に輕快なもの、おもしろいもの、愉快なもの

のと形容がしがたいと同時に、又ひとへに苦痛一邊、又は悲哀一邊と感せず、寧ろその苦痛と悲哀の味ひの裡に何故とも知らず強く吾人を引きつける眞面目な嚴肅な深い鋭い一種複雑深奥な情味のこもれるを認めざるを得ない、現在生活が吾人にとつて苦しからうが面白くあるまいが、尙吾人はそのうちに一種深のあるシンリミした不可思議な情味を味はふのである。

一日の勞役を終つて、生活に疲れた勞働者がたど／＼として家路に還るとき、彼れが苦痛と悲哀とは明らかにその顔面に示されてゐる。

しかも彼が現世に執着する一人の勞働者なる限り、彼は尙他人の得しらの生活の不思議な情趣を味はつてゐる。

人は彼れが食ふ一片のパンの味はひを、ひとへた飢餓をしのぐ肉的快乐とも見るであらう。

然しながら彼が食ふ一片のパンは彼が心血を凝いだ勞役を意味してゐる、努力の

完成を意味してゐる、生存の複雑な滋味を意味してゐる、彼はそこに一種不可思議な情味を味はふのだ。

吾人は生活の情味を餘り簡単に解釋しすぎる、吾人の情生活は極めて複雑である、生活そのもの、複雑なるより更に複雑である、苦と樂とが互に錯綜し融和するのは言はずもあれ、些末な日常の事件に於てすら容易に分析解剖を許さざる複雑な情調が一個の情趣に聯合し融和するのが普通である。

情生活の聯合作用が、智識生活のそれよりも微妙であるだけ、それだけ吾人は些末の事件にも複雑な微妙な情趣を味はふが普通である。

かゝる生活の複雑な情調を傳へるは詩人小説家の役目で、現實生活に於ては詩人小説家へ容易に見出す能はざる複雑微妙な情趣が吾人に味はひ得られる、此の複雑微妙な情趣をひとへに快樂一邊のもの、又は苦痛一邊のもの、如く解するのは始めから生活の情趣そのものを誤解し、延いて人生全體を誤解することである、人生

モリス著

の半面は此の複雑微妙な情趣につままれてゐる。

露骨に言へば吾人は餘りに生活の情味に慣れすぎてゐる、吾人の情の感受性はあらゆる生活の情味を味はふには餘り鈍りすぎてゐる。

情生活が甚しく荒んで、何等か異常な刺激を俟つにあらずんば容易に強い感興を覺えないのは就中近代人士の通弊であると言つてよい。

吾人は如何にもして再び生活の情味を正當に味はふやうに心掛けねばならぬ、生活の情味を除いては、生活とは何であるかは考へられない、複雑微妙な情趣を除き去つた人生は無意義で空虚である、荒寥たるものである、生活から情味をとれば吾人は遂に人生に對して背をむけねばならぬ、従つて生活の情味を度外して人間の幸福は求められないのである。

そして又、前にも言つた如く、生活の情味は苦にもあり樂にもある、貧にもあれば富にもあるので人間世界の階級差別を問はないのである。

然し、安樂であり、富貴であるものはやゝもすれば生活の情味を簡單に物質的にのみ解釋して、眞の情味を知らぬものが多い、従つて眞の幸福を享受し得られないものである。

五 生活の完成

茲にひとつの疑問がある、生活の情味を味はふことが何故人間の幸福であるかと云ふことである、即ち生活の情味は生活全體に於て、どれ程の價値を占める者であらうか。

吾人が日常生活を見るに、吾人は必ずしも情味そのものを目的として生存はしてゐないらしい。

吾人日常の行動は唯何となく或る行動そのものを遂げるので、必ずしも是に伴ふ情味をめざしてはゐないやうだ。

三度の食事はこれに伴ふ複雑な情趣が全然豫想されてゐない譯ではないが、必ずしも情趣そのものが目的ではなく。むしろ食はんがために食ふので味はんがために食ふのではないやうに見える、即ち何となく三度の食事を欲するやうに見える。

生活に關しても同じ道理である、吾人はたゞ何となく生活を欲するので、必ずしもその是に伴ふ複雑な情味は味が爲にのみ生活するのではない。

一方から見れば生活はいかにもブラインドに見える、たゞ生のために生を欲するやうに見える、之に伴ふ情味の如きは眞に伴生物にすぎないで何等重要なものではないやうに見える。

唯わけもなくブラインドリーに働きたいから働く、遊びたいから遊ぶ、食ひたいから食ふ、寐たいから寐る、必ずしも労働や遊戯の情味のためではないやうである事實生活の目的がその情味ばかりであるとは言ひにくい、情味は如何に複雑で微妙であつても、それが生活の唯一目的でないことは明白である、吾人はたゞ情味のた

めにのみ生活するとは思はぬ。

然らば生活の情味の価値は何所にあるか、生活全體に取つてその情味は何等重大の価値のない者であらうか、我等は決してさうは思はない、むしろ生活全體にとつて、その情味は一種深い重大な關係あることを認めざるを得ない、

吾人が日常生活の行動を見れば一見いかにもブラインドに見える、何等の根據もない盲目的動作のやうに見える、然し一歩進んで考へれば斯やうな盲目的動作も畢竟は吾人が情意の要求に根ざしてゐる。

既に情意の要求に根ざしてゐる限りは、かゝる動作も如何に不明瞭であらうとも全然これに伴ふ情味を豫想しないとは言はれない、勿論場合に依つては殆んど全くブラインドリーに生活の情味を豫想しない折もあるが、普通の場合に於てはたとへ漠然ながらも不知不識の間に斯る情味の豫想に殆んど必然的に混入してゐるものだからに吾人の生活には何等の情味も伴はぬと定める、吾人が一切の行爲に何等吾

人の感興を引くに足るの情趣も纏綿しないとす、斯かる場合にも吾人は依然として生を樂しむであらうか、ます／＼生活の範圍を擴張するであらうか、食物が極めて無味であると假定する、生活が極めて無味乾燥で殆んど全く吾人に冷々たるものであると假定する、吾人は尙ほ且つ食ひ且つ生活することを欲するのであらうか甚だ疑はしいのである。

斯く考へ來れば生活の情味が生活全體にとつて如何に重大なる位置を占めるものであるかは明白である。

生活の情味は生活の刺激者であると同時にその完成者である、吾人を生活に刺激するものであると同時に、吾人をして生活を樂しませるのである、即ち幸福を享受させるのである。

情味をばなしては生活を考へるわけには行かぬ、もちろん情味は生活の全部ではない、然し生活を成就して人間を幸福に導くものは情味である、情味なき生活は人

間にとつて如何に荒寥寂莫たるものであらうか、生活の情味は無論生活の唯一目的ではないが少くとも生活の目的を完成に導くものである。

複雑微妙な情味を知らずして吾人は完全に生活の目的を遂げたとは言はれない、幸福を享受して人生を楽しむには必ず生活の情味を味はふことを條件とする。

かくの如く生活の情味は、生活の刺激者であると同時にその完成者であるとするれば、吾人は及ぶべき限り廣くかつ深く此の情味を経験するのが本望であり至願である。

かやうな情味の経験が廣く深くなればなるほど、吾人の生活の範圍はますます廣張されその内容はいよ／＼豊富になつて行くのである、従つて幸福を享受することもますます廣くいよ／＼深くなるわけである、必ずしも貧富貴賤の別はない筈である、否、むしろ貧しく賤しいものほど深刻な、おごそかな、眞實な、幸福を體現し得られるのであると思ふ、これが人間生活の妙諦である、人生の本願である。

六 生活と宗教

然し尙ほ茲にもうひとつの疑問が生じて来る、前述した如く、生活の興へる情味は極めて複雑であり微妙である。

尋常の苦樂以上に強く吾人を引きつける一種不可思議な力をもつてゐる。現世に執着し飽く迄生の情味を味はんとしてゐる、それが幸福である、生活の目的を完成するものであると云ふ。

然しながら、在來吾人が経験した生活の情味は、果して吾人をして現世に執着せしむるに足る程大なる價值を備へたものであらうか。

現に吾人が現世に執着する以上、生活の情味が不思議な影響と感化とを吾人に與へてゐるのは事實である。

又生活の情味が吾人にとつて捨て難いものであることも事實である、然しこれ等

生活の情味が果して五十年の生を托するに足るだけの価値あるものであらうか、即ち人生は現に吾人が體驗しつゝある味はひだけの物にすぎずして、それ以上には何の価値もないものであらうか、人間の一生は蜉蝣の生活に勝ること唯一歩に過ぎざるものであらうか、此の疑問はやがて當然の結論として生せざるを得ない。

思ふに人間の一生はやはり人間の一生である、それより少くもなく多くもない、吾人は此の一生のうちに安心を求めなければならぬ、従つて又吾人は現世が與ふるさまざまの情趣のうちに中心の満足を求めなければならぬ、朝に道をきいて夕に死すとも悔ゆるなき大情味を求めなければならぬのだ。

吾人の一生はチータのファウストの一生の如く、死すとも悔ゆるなき大情味の追求であらねばならぬ。

いく度か蹉躓し、いく度か失敗し、いく度か邪路に踏み入り、いく度か深淵に沈む努力の旅路であらねばならぬ。

生活の情味に何の感興も覺えぬものは吾人の關する所ではない、苟しくもその不可思議な生活の情趣に生を戀ふるものは、その不可思議な情味の中から吾人の一生を托し生命を任ずるの大情味を求めねばならぬ。

斯やうな大情趣を求むることますます深くれば、ますます深く人生を解する所であつて、いよいよ深く人生を解することは、やがて人間の本願であり人生の歸趣であらねばならぬ。

斯くの如く考へ來るときに現實生活の情味は、現實以後の生活にも關聯してゆかねばならぬ。

即ち要するに吾人の生活を現在肉身の死滅以後にも連續させねばならぬ、茲に宗教の領分がはつきりと太い線をもつて描き出されるのである。

七 人生の疑義

人間五十年の生活がしかく價値あるものであらうか、苦痛をも悲哀をも一種の情味として味はつて、そのうちに幸福を見出して行くほど價値あるものであらうか、現世の生活をさへもさうした解釋のもとに生きねばならぬものか、肉體の死滅以後にも尙ほ生を見つけねばならぬであらうかは、人間共有の疑惑である、三千年の昔から今日に至るまで、否、アダム・イヴ以來與へられ、然して地球の死滅までも續く疑惑である。

然り、何と言つても今は廣い意味に於ける懷疑時代である、表面から見れば所謂進取、活動、新思想、活事業が社會の各方面に溢れてゐながら、裏面に立ち入つて見ればあらゆる疑惑が智識ある階級の人々を支配してゐるのである。人間の心には凡人的方面と凡人には甘んぜられない智慧の兩方面とが備へられてある。

果てしのない懷疑に見切りをつけて凡人生活に返つて、實際上の業務に全心を打

ち込んでゐる間は、しばらくは懷疑の悪夢にも襲はれないが、智慧の方面が頭を持ちあけるとわれ／＼は限りのない疑惑に苦しめられる。人生が疑問と不可思議とに満ちてゐる限り懷疑は免かれ難い人間の運命である。

然し其の懷疑の理由をもつて人生を疑惑の塊と斷じ永久に懷疑的狀態に浮沈するのは人類生活の本意ではない。

人生はたとへ疑惑の塊であるにしても多少にても是を解かうともしないで、懷疑は到底人生の全部であるかの如く見做して生涯を疑惑の翻弄に委ねるのは決して生活の本意ではない、古來の極端な懷疑家の例に徴して見ても、初めは現實に立脚した懷疑も中頃から現實を離れた空想に傾き次第に疑惑の深みに沈んで遂に絶望と死とに終つたものも少くはない。

懷疑が吾人に免かれ難い運命であるとしても、唯仕方がない、己むを得ない、如何することも出来ないとのみ思ひ込んで運命の前に呆然一身を投げ出して、積極的

には何等の努力を試みることも無用であるかの如く悲観するのは誤つてゐる、在來の努力の失敗に懲りて人間の智慧や努力も人生の懷疑に對しては到底空である如く疑はなければならぬと云ふ筈はない。

若し左様のことであつたら歴史も人生も或は空なものに見ねばなるまい。勿論此の種の疑惑は容易に打ち消されない、事實の上に疑惑が解かれない限り、相當の智識を備へたものは絶えず此の種類の疑惑に苦しめられる。

我々は是に對して殆んど爲す所を知らない、此れに十分の理由もあれば根據もある、然も翻へつて思ふに果して永久不斷の懷疑が全人生であるとすれば、人生はもはやわれ／＼人間に失はれたものである。

生活の意味はついに死に過ぎないものになつて終ふ、斯くの如き人生觀はいかにしても人間の堪え得る所ではない、人類の過去の努力が如何ならうとも、又たとへわれ／＼人間の努力が失敗に終らうとも、永久不斷の懷疑に安んじてゐられないの

が人間の本性である。

われ／＼は如何にもして此の全懷疑の不安状態から脱しやうと思つて努力する、又しかし努力せざるを得なくなるのである。

八 懷疑と努力

人生の懷疑に對する人間の努力は、初めから必然失敗を豫想すべき、無益な行爲では決してない。

日常生活の事實から言へば深い疑惑に包まれながらも、われ／＼は尙一種の希望に生きてゐる。

意志は飽くまでその努力を続けやうとする、此の立脚地からふり返つて見ると懷疑者の態度にも缺點があり、その不安状態から脱しやうとする努力にも正當な理由があるやうだ。

懐疑の不安から脱するため、一切の疑惑の前に目をつぶつて、再び無智の動物生
努力に返ることは今日の人間には無理な注文である。

又一派の學者の主張する如く人類をすべて凡人視し、甚しきは無智の動物と同一
視し、われ／＼には最早何等深甚な疑惑もないやうに裝ふのははこれも正しい説と
は思はれない。

人間が複雑な慾望に満ち、且つ智識を備へた限り、複雑な懐疑は遂に人生に免か
れ難い運命である。

強いてもろ／＼の懐疑に目をつぶつたとて何の利益もない、古來の宗教家や哲學
者は、正當に人類の疑惑とすべからざるものを疑惑とした傾きがあるにもせよ、慾
望の發展には限りがなく、慾望が複雑になればなる程、實生活上、ますます複雑な
懐疑が発生し來る可きは自然の道理である。

かやうな懐疑に對する人類のあらゆる努力は果して全然効のないものであらうか

全懐疑論者は一概にこれを無効のやうに思つてゐるが、われ／＼は尙ほ熟考すべき
點があると思ふ。

過去人類の歴史は一概に之れを空と言へばそれ迄であるが觀察點を換へて考へれ
ば小さいながらに少くとも人類にとつてはその努力は決して全然無効であつたとは
言はれない。

これを全然無効である如く疑ふのは吾人の眼識を以て古人の努力の結果を推測し
た誇張的獨斷ではあるまいか。

過去の文明はたとへ粗末であるにしても、吾人の先祖が苦心に苦心を重ねた努力
の産物である、無智の動物生活から今日の文明生活に至るまでの徑路は悉く人類
自身の努力ではないか。

此等の努力が全然無効であるとは言はれない、懐疑論者はやゝもすれば在來の宗
教も哲學も空であつた如くに放言する、然しながら昔の宗教や哲學が今代人に架空

と見え、現代人の懐疑を解くに足りないのはむしろ當然である。

精しく當時一般の文明を考察してきて歴代の宗教史又は哲學史を味はへば、古來の宗教又は哲學は、今日から見ても、その當時の時代々々には多分の貢献を致したものに相違ない、此時を全然空である如く言ふのは眞に宗教史又は哲學史を解してゐる者とは言はれぬ。

勿論過去の哲學や宗教が過去の人類が苦しんだ全體の疑惑を解き得たか如何かは疑はしいが少くとも其の懐疑の一部分はそれに依つて解かれたには相違ない、懐疑は大にして努力の結果は小さい、小さいけれども少くとも人類にとつて其の努力は決して無効であつたとは言はれない。

たとへば過去人類の努力が全く無効であつたとしても、我々には尙一縷の希望がある、過去の努力の無効は必ずしも將來の努力を豫言するものではない、懐疑論者といへども斷然斯やうな豫言は敢てなし得ないであらう。

事實に於てわれ／＼は知らず／＼の間に此の種の努力を重ねてゐる。斯くの如き努力は懐疑論者にとつては潜越至極のものであらうけれども、終生懐疑に包まれた不安の生活と比較して、其の得失がはたして何所にあるかは考へるまでもない。

吾人が情意的生物である限り、又吾人が絶對虛無觀に陥らない限り、事實上日常生活に處するわれ／＼は、絶えず多少の努力を重ねてゐるのである、人類の性質から考へて見ても、われ／＼人間は到底かく努力せざるを得ないのである、然して少しでも懐疑から免かれ不安の境を脱した生活を送らうとするものである、よしそれが他人からは不安に見え、自分自身に平安であるだけのことでも悪くはない。

九 人生の常態

從來人間が人生と云ふことを考へる態度を見ると大方はその自然的、物質的方面にのみ重きを置いて却つてその意識的精神的方面を疎外してゐる。

自然的方面は無論人生の土臺であり半面である、之を疎外するの不可なることは言ふまでもないが、多少深く人生を考へたものにとつては、意識生活が、人類生活の特色である、人生といへば主としてその複雑な精神的現象を意味する、人生の進歩も退歩も疑惑も努力も主としては主觀の精神的生活内のこと、人生一切の開展は自然現象的方面に求められるよりは、主としてその精神的方面に求めらるべきものである。

精神生活の分野はわれごとにとつては限りなく廣く限りなく深いものと感ぜられる、我々はそこに自然界よりも更に廣大無邊な別天地が存すると思ふ、人類のために運命づけられた天地が此所に存在すると思ふ。

然るに此の世界は初めから永久不變な形に於て静止してゐる世界ではない、或る定つた永久不變の法則と實相とを備へた世界ではない、人類が創造し、人類が改築し、人類が自由意志をもつて經綸し來つた人類の世界である、人生が將來いかに開

展すべきかは、ひとり人類の努力如何に依つてのみ定まるべきもので、決してこれに定まつた未來の運命はないと思ふ、人生をサインとせずしてエルデンと觀るも之がためではあるまいか。

懷疑論者の態度を見ると、やゝもすれば或る一定不變の眞理が客觀的に存在するものと思ひ込み、消極的態度のまゝ斯る眞理に遭遇しがたきを悲しむと云ふ傾向がある。

人生の祕密が何所かに隠れてゐるやうに思惟する氣味がある、これがそもそ誤解である、人生は人類が作つてゆくものとすればわれごときの疑問とする者は何所にも隠れてはゐない、吾人は吾人の意志をもつて人生を如何に作るべきか、その眞の疑惑が存するのである。

人生をいかに造るべきか、われを如何に造るべきか、これが實際上の最も眞率な又最も切實な懷疑である。

斯くの如き懐疑は切實なる生存肯定の懐疑である、懐疑のための懐疑ではなくして、生存のための實際的懐疑である。

勿論われ／＼は斯る懐疑のために苦しい思ひをする、されど如何なる手段をとつても又如何に失敗しても結局いづれかの方面へ自己を造つて行かないわけには行かぬ、いづれの方面へか努力せずにはゐられない。

彼の空想的懐疑論者は何所にか客觀的に潜んでゐる秘密の暴露を消極的に俟つてゐる、いつまで待つてもそれは無効だ、努力の伴はない懐疑は永久に解決せらるべきものではない、然るに實際的懐疑論者は、自分の努力のために疑惑し、努力の結果の上に懐疑を解決しやうとするのである。

その努力の目標が何であるかは、前述各章に渡つて見れば十分諒解しうると思ふ。

現代に於ける懐疑は大きく深い、われ／＼は如何に人生を造る可きかに惑はざるを得ない、何故ならばわれ／＼の努力は失敗があり間違がある、その成功するものは極めて少数である、然もそれが人生の常態であらうかも知れない、われ／＼はさう考へるより外に致し方はない、ある程度まで自然の力（或は神といふ）に依り、そこに自分自身の積極的努力を加へて疑惑の解決を心がけねばならぬ。

懐疑の努力は空想ではない、空想の實現は人間の歴史である、われ／＼が永遠の生命にまで生く可き此の空想を、實際化するべき努力をすることに、眞の人生の實相があるのである、幸福は此の自覺から生ずるのではあるまいか。

第九章 生命論

一 墓の彼方に

生は肉體的現實的である、生命は精神的永久的である、故に生活論の結論は生命論に移らねばならぬ。

生命とは何であるか

ゼームス博士は曰く、

世の學者は大脳旋回を心靈の作用とする頭上打撃、腦刺激は吾人の觀念を變ずるが、然しこれが爲めに生命存続不可能論を唱へるわけには行かぬ、オルガンの音は機械より生じたものではない、唯機械を通じて現はれたのである。吾人の生命も生理機關より生じたものではない、唯機關を通じて働くのである、音

はオルガンそのものにあらぬが如く、生理機關は生命ではない。

人の肉體は、人の生命を保つべき生理機關である、生命そのものでは決してない生活は決して生命の全部ではない。

人の生命は人の身體の死滅と共に亡びて終ふものであらうか、言ひ換えて見れば人間の生命は現世限りのものであらうか、死は果して人間の終局であらうか、若し死が人間萬事の終局であるならば、生活は生命である、生理機關は精神である、鳥も、獸も、蟲も、魚も、宇宙のあらゆる生物も、その位のこととはしてゐる、美にまれ醜にまれ、益にまれ害にまれ、とにかく地上に生活して死ぬまでは生きてゐる、人間は少なくともそれと變つたところがなければならぬ。

善悪美醜の意識のない鳥獸虫魚と同じであるとは言はれない、人間には自意識といふものがある、その自意識のあるところが鳥獸虫魚と變つた點であるならば、人間の生命は、死と共に、即ち生活の終局と共に終るものとは思はれない。

詩人ドレチヨージマレリツウは、

吾人の至幸至福のときはその死ぬるときにあり。

と歌つた、死が人間萬事の終局ならば、その死は決して至幸至福ではない筈である、使徒パウロは

われ等の最も希ふところは此の世を去らんことなり(ピリヒ書一章)

と言つた、ソクラテスは、捕へられて毒害されやうとした時に、

嗚呼、彼等はわが形體を殺すことを得やう、然しわが生命までを絶つことは出来ぬ、わが生命はこれに依つて却つて自由境に至り不死を樂しむ。

と言つた、古往今來、大偉人、大哲學者はみな斯くの如く、活生と生命とを區別してゐた、のみならず、現世の肉體的生活を捨てることを何とも思つてゐない、むしろ喜んで死に就いた、何故ならば彼等はその肉體は死滅しても、その生命はこれが爲めに、却つて自由を得、幸福に至ることを信じてゐたのである。

呼吸たゆれば人は死ぬ、然して土に穴して葬り去られたとき、英雄もなく君子もなく、悪人もなく善人も愚者も智者もないものならば、人の世界は蟲や獸の世界と何の選ぶところはない、人生は恰かも兒戲の如く天地に道なく、世界に意味なく、善悪なく、生くる甲斐なきものとなる。

然し生活は生命ではない、死は人間の最後ではない、然り、人の生命は身體の死滅と共に終る可きではない、墓の彼方には不死の生命があるのである、寧ろ肉體の死は永遠不死の道に入るべき唯一の關門であらねばならぬ、人間の死は、水上の泡が消えるやうな、それ程はかなく跡方のない詰らぬものではないと云ふことは、以上述ぶる所に依つても分ると思ふ。

二 不滅の生命

使徒パウロは

一度で死ぬることゝ、死んで審判を受けることは人に定まれることなり。
 と言つた、人間は誰でも死なねばならぬ、現世を悲観してゐた人は勿論、樂觀して暮した人でも、同じく死なねばならぬ。

善人も死ねば悪人も死ぬ、一度び死ぬることは定まれることなりである、行きつく道は死の門である。

然して又「審判を受けることは人に定まれること也」と言つてゐる如く、人間は生前の行跡に依つて、天地を支配する神の審判を受けねばならぬ、生前の行爲の善悪如何に依つて審判の善悪如何が決定される。

故に私利を營み我慾を働いた人々にとつては死は實に恐るべき最後である、然し安分知足の生涯を送つた人にとつては、死は必ずしも恐るべきものではない、地獄か極樂か、鐵札か金札か、それは各人の生活如何に存すること、強いて神がそれを審判しやうとするのではない。

富力權力學力の關係から離れて、たゞ生活そのものをのみ唯一の證據物件として神の公判廷に立たねばならぬ。

神は人の行に従ひて各人に其の報をなすべし、耐忍びて善をなし、榮光と真理と不朽とを求むるものには限りなき生命をもて報ゐん、争ひをなして真理に従はず不義につくものは報ゆるに患難辛苦を以てせん(羅馬書 章)

と、パウロは言つた、死後の生命があればこそ、人は此の世の生活を樂しむのである。

善をすゝめ惡を退ぞけて生活せねばならぬのは此の故である、肉に死ぬるは靈に生くる道である。

此の故にこそ人の生活は意味深い事實として、各人お互に自重せねばならない事になるのである。

生命の不滅と云ふことは、何も今日吾人が始めて發明した事實ではないのである

要するに人間の生命は肉體の死滅と共に亡びるのでなくて、却つて死と共に永遠に生くるものであると云ふことは、佛教信者と、基督教信者とを問はず、古往今來世界人類の大半に深くその根を下してゐる牢固として抜くことの出来ない事實であるのみならず、實に人生觀の根底をなすものである。

何故人生觀の根底をなすかと言へば、生命不死の信念は現世の生活を意義あらしめやうと人間を努力させる。

生活を意義あらしめやうとするのは即ち人生觀の根本である、此の信念のない人生觀は誤つてゐる、生命の不滅を信せざる生活は空である、無意味である、人生觀は生命不滅の信念に依つて始めて確立する、人生觀の確立したものとつては、現世の生活は意義があり希望がある、患難にも困苦にも、喜悅と光明とを見出しつつ生活することが出来るのである。

斯くの如き人の生活は、富はなくとも、地位はなくとも、貧しくとも賤しくとも

尙ほ大なる幸福を享受し得られるのである。

人の心を暗黒より光明に、絶望より希望に、不幸より幸福に、變化する力を有するものはたゞこれ此の信念の確立である、人間の努力が鳥獸の努力と異つてゐるのは此の點のみである。

不死の生命を信するものは又同時に死後の審判を信じ、死後の審判が現實生活を標準とするものであることを信する、故に現實生活を正しく、善に、意義あるべく努力する、故にパウロの所謂限りなき命をもつて報わられるのである、更に言葉をかえて申さば、生命の不滅を信するものにして、始めてその生命が不滅であり得る次第なのである。

生命の不滅を信せず、現實生活を無意義に費やす者の人生は、現在ひとゝきに限られてゐる、活動の範圍もせまく力も弱い、然して往々不正不義に陥りやすい。

三 人類の將來

だが然し、それは人間個々に就ての生命である、人類全體の將來はどうなつて行くのであらうか。

われ／＼は萬能の神を信じ、何事も神に依つて一切たゞ神の心の儘とし、善行をなせば善果を報ひられ、悪行をすれば悪果を報わられるものと考へ、ひたすら、神の意に添ふことに依つて人類の全的救済を庶幾すると云ふやうなことは、主として感情生の上からの安心立命またそれから二次的に導き出される種々なる社會的効果の上などからはいかにも結構であるが、然しながらそれだけではわれ／＼の智的要求を満足させることの出来ない場合がある。

われ／＼個々の人間としては、上來述べ來つた意義で満足もすれば生きてもゐられるが、もう少しこれを智的に考へて見ると、地球上に於ける生物の生命が、他が

地球的若くは宇宙的の大事變によつて脅威されるやうな事がありはせぬかと云ふ疑問が生ずる。

若し、地球の表面から空氣がなくなつてしまつたら如何であらうか、勿論生物は一般に生活する事が出来なくなるが、しかし乍ら地球は月や星のやうに形が小さくなく、従つてそれ等の天體のやうに折角出来た空氣をも自分の體の周圍に引き附けて置くだけの重力(即ち牽引力)が足りれば、自然にそれを空間中に放散消失して終ふと云ふやうなことがないから、さう云ふ事情から地球が忽ちその大事な空氣をなくして終ふやうな悞はあるまい。

また其の空氣の成分に付いても、動物、植物、及び海水の相互間に於ける微妙な調節作用に依つて、動物の生活に必要な酸素も缺乏せず、植物の生活に必要な炭酸瓦斯も適量にあると云ふやうな具合に都合がいゝ状態になるかも知れない。

かつて地球は、其の軌道の形狀の變化や、地軸の動搖等のために太陽から受ける

熱の量に著しい變調を來して、屢々氷河時代と云ふ恐ろしく恒寒な氣候の支配する時期を経験したことがある。

さう云ふ時期には何年たつても雪が解けず、地球の表面は厚い氷のために全く閉ざれて、生物は棲息するに處がなく、且つ想像することも困難なやうな激しい寒氣の爲めに大抵の者は死滅してしまつて、餘程抵抗力の強い幸運な者のみが僅かに殘存して餘命を保つてゐた。

そんな恐ろしい氷河時代が今後再び此の地球を見舞ふことはないであらうか、それは勿論一概に何れとも斷言は出來ない、然しさう云ふ事實は過去に於て既に屢々起つたことである。

その原因とも見るべきものは絶対に取り去られた譯ではないから、將來にも起り得る可能性はあるのだと言へる、何時起るかは確かに指定する事は出來なくも、長い年月の間には何時か起り得るものであると云ふことは豫想される。

然し現在は最近の氷河時代がやうく退散して、比較的温和な氣候の時代に入つたばかりであるから、さうすぐ新しい氷河時代が引き續いて襲つて來ると云ふこともあるまいし、又たとへ、いつか氷河時代が襲來したところで、それが必ずしも地球全體をちよつとの隙もなく氷河の原と化して終ふと云ふわけではなく、地方に依つては氷河の見舞を受けない所もあるに相違なく、尙ほ人智を用ひてかやうな險惡な状態に對抗し、多少なりともそれを緩和することの出來るやうな設備もあらうから、氷河時代の襲來もさしあたり苦にするには及ばぬ。

地球上に於ける生物は、すべて日光がなければ一時もその生命を持続することは出來ないから、若し太陽が熱を失つて冷えて困るやうなことがあつたら、其時こそどんな生物でもみんな死滅してしまはねばならぬ。

ところが太陽は絶えず非常な勢ひで熱と光りとのエネルギーを空間にむかつて放射してゐるので、自然しらすの内に少しづつそれが冷えてゆき終には全く光り

も熱もない石塊のやうなものになつて、冷たい空間を淋しく運行すると云ふやうな時が来るに相違ないが、併しながらさう云ふ太陽の熱の減少は極めて遅々たるもので、現在われ／＼の所有する智識の範囲内では、それを確實に證明することが出来ない。

従つて太陽が上述のやうな熱と光を失ひ、所謂暗星の列に入るのは少くとも今後尙ほ何千萬年の長い月日を要するのであるから、比較的短かい個體的壽命をもつたわれ／＼人類は此の點に就ても亦餘り杞憂を抱く必要はないやうである。

更に太陽が他の巨大な天體と衝突して其の體を粉碎されるか、或は著しい破壊的影響を受ける程度にさう云ふ天體に接近する場合も考へられないこともない。

宇宙間には何億と云ふ澤山な星があつて、それがみな非常な勢ひで空間を疾走してゐる。

太陽も亦その統卒する或星(地球もその一つである)と共に同じやうな運動をして

ゐるのであるから、いつかは天體の中の或者に接近若くは衝突する場合がないとも言はれぬ。

太陽は比較的近い過去に於て既に一度さう云ふ機會があつた、その結果が現在の太陽系が構成されたと信せられてゐる。

一旦さう云ふ機會があれば一切の生物は微塵になるか、それとも瓦斯體に變化して消失するか、それが問題だが、天文学の教へるところに依ると、そんな機會は吾がそれに就て何等顧慮を要しない程ごく／＼稀に生起するものであると云ふから是亦現在のわれ／＼人類が特別に憂慮する必要はない。

要するに地球乃至宇宙的事變に原因するわれ／＼生物に對する生命上の脅威は、何れもかなり長い時間的の餘裕のある者らしいから、吾々人類一般の實生活から言へば、別にとり立て、問題にするほどではないらしい。

人類將來の運命に就ての、對外乃至は對自然の關係は以上の如くであるが、その

對内關係は果して如何かに就て次項に調べて見やう。

四 人類の進化

生物學者の中には生物としての人類は既に進化の絶頂に達してゐるから、將來は漸次退化して行くと云ふやうに考へてゐるものがあるやうだ。

米國のある學者は

人類の個體的進化は既に遠い昔から大體停止してゐる、吾々の手も、眼も、腦も、最早現在の状態より一層完全なものとなる見込は少ないのだ、併しながら人類は其の特殊な理智を基礎とした社會的結合の力に依つて其の缺點を補ふことが出来るのだ。

と云ふやうな意味のことを言つてゐる。

人類の個體的進化が停止したところで或は又それが一部分多少退化しかけたところ

ろで、系統的にいへばまた極めて若いわれわれ人類のことであるから、それが近い將來に於て忽ち絶滅してしまつたり、又は猿よりもつと下等な動物に退化してしまつたりするやうな憂ひは萬々あるまい。

それ故、此の問題も亦、一面それに就て勿論十分豫防的の注意を拂ふ必要はありながら、それが直ちにわれわれ人類のより高きものに向つて貴重な精進憧憬の念を挫折銷磨せしめるやうな性質を持つてゐるものと解釋するの必要はないと思ふ。

上來屢々記述したところから、われわれ人類の將來に於ける運命は、一に係つてわれわれが、將來われわれ自身を如何にとり扱ふかと云ふことに存することが分る然らばわれわれは我々自身を如何に取り扱つたらはよいか、つまり自分の運命は自身自身が改築し、創造するところのものであるには相違ないが、それをどう改造するかは問題である。

其所に社會組織改善の必要が生じて來る、人間修養の必要が生じてくる、不合理

な階級的の社會を合理的平等的に改造し、動物的物質的の人間を精神的心靈的に修養し、現實的生活を永遠的生命とする努力を必要とするのである。

つまり人類の精神的改造の必要がある、即ち人間は社會制度の改造と、精神的教養とによつて、純真理想の境地にむかつて進み、又一面永遠不死の生命に入らねばならぬ。

五 悲觀と樂觀

社會的組織の改善に就ては既に第三章 社會論に於て是を説いたから此所には省略して、たゞ生命——精神的教養といふことに就て述べやう。

凡そ人間の精神——思想を理想主義と、唯物主義との二つに區別することができ

る。枝葉の問題や所説はそれ——いろいろの形容がついてゐるのでちよつと異なるか

の如く考へられるが、結局は此の二つに大別して差支はない、此の二つの思想を代表するものが、一つはエペソの哲學者ヘラクリタスで理想主義に生き、一つはアブデラの哲學者デモクリタスで唯物主義に傾いてゐる。

有名な喜劇作者のアリストファネスは理想主義のヘラクリタスを泣き蟲といひ唯物主義のデモクリタスを稱して笑ひ上戸と言つてゐる。

實際此の世の中は詮じつめれば泣くと笑ふの二道しかない、泣いてくらすも一生であり、笑つて送るも一生である。

むつかしく言へば悲觀と樂觀である、われわれ人類は泣いて一生を送つたがよいか、笑つて棺に入つたがよいか、笑ひたいと思つても笑へない人もある、泣くべきところも泣かないで過す人もある、そもそも吾人は泣き笑ひ、その何れに組すべきであらうか。

六 一元的宇宙観

理想主義のヘラクリタスは、世の中の人がよく知つてゐる通り、エレア派の哲人で流動の哲學を説いた第一人者である。

獨逸社會黨の創始者フアヂナンド・ラサールは彼を古代ギリシヤの哲學者ヘーゲルに比較してゐる、たしかにヘラクリタスはヘーゲルによく似たところがある、流轉を以て宇宙を説明し、火を以てその本體としたのは正にヘーゲルである。

彼は又理念を以て宇宙の本體と見、一元的に宇宙を見やうとする傾向をもつてゐた、彼は次のやうに言つてゐる。

世界にはたゞ一つの智慧がある、それは自ら意志するがチユースと呼ばれる可きものではない。

凡ての物を貫く此の世界の秩序は神にも人間にも是を造らなかつた、それは始

めからあり、今あり、後ある、永遠の火であつて適當な時に燃やされ、適當な時に消されるものである、神は晝であり夜であり冬であり夏である、戰爭であり平和であり満腹であり飢餓である、神は火の如く變化し香として薫せられるときに、その各々の匂で知ることの出来るものである。

人間は物によつて善惡を區別する、然し神に於ては凡ての物が善であり美である、凡ての物は有りとして又無い、凡てのものは有り、然し實は何にもないのだ――

是等の思想が彼を悲觀せしめたものか如何かは知らぬが、とにかくヘラクリタスは現實に對しては頗る悲觀的である、更にこんなことも言つてゐる。

我等が生きてゐる間は魂は死んでゐるのである 我等の肉體が死ぬのと一所に魂が生きかへる。

近代に於てギリシヤ思想の批評家として天才的であると稱せられてゐるガームス

アダムスはその著「ギリシヤ宗教の師傳」の中にヘラクリタスを論じて、彼程眞面目な純潔な哲人はなかつたやうに書いてゐるが、彼は全く豫言者的であつたらしいその哲學はヨハネ傳の哲學によく似てゐる所のローゴス哲學であり、その書きぶりはニーチエのフアロアストラのやうな口調で書いてゐる。

凡て唯心的な理想を追ふ豫言者的の哲人はすべて左様した傾向を持つものである傳説に依れば黙想するために其の家督を弟にゆづつて、民衆の愚を罵りながら孤獨を愛して彼の哲學系統を編み出したと云ふことである。

泣き蟲の哲學者は古代に於ても誰しも同じやうな成る一定の型をもつてゐた、その型はヘラクリタスに依つて代表的である、そして今日に於てもその系統なり型なりは少しも變つてゐないのである。

七 唯物的現實觀

デモクリタスは全然ヘラクリタスと反對の傾向を持つてゐた、彼もヘラクリタスと同じ年代の人である。

ヘラクリタスは紀元前五百三十五年に生れ四百七十五年頃死んだ、デモクリタスは紀元前四百九十四年から四百六十年の間に生れたと云ふが、判然とは分らぬ。

何にしてもデモクリタスは人生は物質のみで出来てゐると見てゐた、喜劇作家のアリストファネスの説く所に依ればデモクリタスは人生をチャランバンに見てゐたりして、凡てが嚴肅なものであるとは見なかつた、それで何でもかでも笑つて暮すことを主張した。

ベルグソンも笑ふことは精神が物質的になる時に起るものだと言つてゐるが、デモクリタスはたしかに左様であつた、ベルグソンは勿論、デモクリタス一派の唯物論者は常に、すべてが分子のつなぎ合せである、人間の智慧と言つた所で感覺から出来たものである。

感覺とは要するに分子の反應にすぎぬと考へてゐたらしい、彼等には神はなかつた、眞とか、善とか美とか云ふものもなかつた、彼は斯う言つてゐる。

眞理など云ふものはない、そんなものがあつたところで我等はそれを知ることには出来ないのだ。

我等は何にも知らぬ、知るべきものがあるかと云ふこともしらぬ、ましてや夫れを知ることが必要であるか否かも知らない。

彼の最高の善は、精神の平均を失はぬことにある、恐怖や、あまりの大慾、心配事、悲しみを持ち來らしめるやうなことは何でも反對した、そして彼は結婚にも反對した、彼はこんな立場からすべての理想論と唯心論とに反對した。

八一二つの哲學思想

泣くこと、笑ふこと、悲觀と樂觀、唯心論と唯物論、理想と現實、この二つの哲

學系統は哲學史上に於ける永遠の型である。

そして新しい社會哲學が現はれるにしても、ヘラクリタスとデモクリタスとは、兩々相對峙して決して譲らない、泣き面をして宗教家は豫言者の口吻で、社會の墮落を罵り超越的理想を説く、左様かと思ふとマルクン直系の現實暴露派は道德を笑ひ組織を笑ひ人間を笑殺する。

人間一人の死の猫一匹の死と何らの變りはない、社會は矛盾であると言つて大きな聲で笑ふ、生を笑ひ、死を笑ひ神を笑ふ、デモクリタスは斯やうな哲學者である理想主義者が泣くと云ふのはおかしい、けれども悲劇の出生から言つても理想のないものに悲しむべき道理はないのである。

又その反對に理想を消した唯物論には宇宙が滑稽に見えるのは不思議である、笑ひは多く想像もつかない組み合せから起るのである、物質のみが組み合はせて出来たと考へるには宇宙は餘りに不可思議に満ちてゐる、笑ひが出るのは當然である。

理想主義の觀念論者は泣く

唯物史觀の實在論者は笑ふ

今日の社會は前にも行つた如く、結局せんじつめれば、此のヘラクリタス系統の哲學と、デモクリタス型の哲學との二つによつて、泣き笑ひの兩舞臺を見せられてゐるのである。

神と最高善を説く宗教家は、天と死後を指示して、現實の世界苦から人間を救済しやうとは言はない。

ヘラクリタスの如く魂は肉體の中にあつては死んでゐるが、肉體の死と共に蘇生して永遠に生きるといふのである。

その反對にデモクリタスの所論に共鳴する物質論者は、現代に於けるパンの公平とパンの幸福を説くのである、そして最高善の不必要と神の無能を説く。

此の二つの領域には仲間地帯が殆んど見付らないやうだ。

然し、仔細に考へれば此の二つの説は一應の理屈はあるが、二つながらその争點がちがつてゐる。

ヘラクリタスの如く法則や理念や智恵ばかりからその哲學を出發するのが間違つてゐる。

デモクリタスのやうに、物質と物質との組織を考へられる感覺のみから出發するのも又間違つてゐる、笑ふことも、泣くことも、初めからあつたのではない、悲觀と樂觀とは、生命があつてから後に起つた問題である。

然り、人間の究極するところは生命である。其他には何もない。

九 人間の究極

或る者は斯う教へて呉れた。

物質と云ふものが、實在的にあるのではない、物質とは人間の感覺の符號を借りた表象である。

電氣物質觀が組み立てられてからは、電子は精神と物質の合の子のやうなものであると分つたが、然しそれは重量のある物質ではない、それは精神によく似たものである。

それを我々が重さのあるもの、擴がりのあるものと感ずるのは、われ等の感覺がまだ發達しないからである。

今日でも尙唯論などを主張してゐるのは時代おくれである、勿論さうかと言つて理念や智恵ばかりで世界が解釋出來ると思つてゐるのも餘程人のいゝ甘い人である。

物質は電氣でもなければ精神でもない、また電氣とよく似てまた違つてゐる生命のエネルギーはたゞ精神でもなければ物質でもない、宇宙はそんなに簡單に考へる

には餘りに神秘である。

生命の外に神はない、生命の外に宇宙はない、生命は凡てを超越してゐる、故に肉體的生活の亡びた後にまで續く、宇宙の法則と云ふのも、此の生命の死後にまで續く内在的生活を助けるところの一つの道程である。

生命はヘリクリタスの考へたやうに二つの魂を持つ事は出來ぬ、生命は物質を貫ぬいて動いてゐる。

物質と見えるのは生命の衣裳である、死が或個人を奪ひ去ることは出來る、然しその生命は過去に去つただけであつて、死が過去の生命と人格をも亡ぼしてしまつた譯ではない。

物質を食ひ破つて生え出た生命は、物質が引き退いて行つてしまつた死後に滅亡するとは考へられぬ、そんな力のない生命ではない。

生命は物質より弱いものではない、否物質は生命の衣裳であり温室である家であ

る、家はこはれても衣は破れても人は尙は存するが如く、物質は死んでも生命は残る。

宇宙はエネルギーである、生命はその本體である、生命は進化する、進化は價値の上進である、宇宙の本體は生命の價値上進である、生命は進化せんが爲めにある個體に死を與へる、死は生命進化の前提である。

然り生命は死後に於て進化する、無生の地殻を破つて延び上つて來た生命を有する人間が、何故有生の死を恐れるか、死はひとつの約束である、前提である、流動の本體も、笑の根源もみな此の生命の中に溶け入るものである。

基督教の天國も佛教の極樂も生命の中に醗酵する、かつて地球上のあらゆる何ものも、生命をのぞいて考へられたことはない、物質も生命があつたればこそ見られもし考へられもしたのである。

物質は生命の附録である、パンは生命の糧ではない、生命の全部ではない、生命

のある一部を充たすべきある一つでしかない、生命はパン以上のある多くのものを要求してゐるではないか。

宇宙を大きく、美しくして行くのは生命の進化である、宇宙の構造は個々の生命が緯となり、經となつて完成する、パンは宇宙を構成する能力を持つては居ない生命は絶對である、宇宙そのものに通じ、神そのものに通ずる、生命は故にわれわれ人間に内在し、然して人間を超越してゐるものである。

生命は人間の内考へ、泣き、笑ひ、しかしして物を言ふ、生命は人間であり人間を超越してゐる、生命は人格であり人格を超越してゐる。

然り生命は物質的肉體を家とし、宗教、哲學、美術、科學、あらゆる裝飾に依つて宇宙の構成をより多く善美ならしめやうとするものである。

此の生命を人間は考へなければならぬ、何所までも限りなく伸びる人間の生命、宇宙のあらん限り存在する人間の生命、その生命を單に生活のみに任せることは出

人生を超越する力

来ないことでもあり、また不自然でもある。

生命は人間の究極である、人間の究極は生命である。

12, h28
V.T.

第十章 家庭論

一 家庭の力

人間が、幸福であることより、不幸であることは、これを思想的にしては、信仰、生命と云ふような事に對する確固たる觀念の樹立如何に存するけれども、社會とか生活とかいふ物質的方面から考へると、家庭の善惡と云ふことが非常に力がある、否、むしろ家庭の善惡の如何は人間の思想をも支配するものであると思ふ。

家庭はあらゆる人道の要素が備はつてゐる、即ち親子間の道徳、夫婦兄弟姉妹間の道徳、親族雇主との道徳、其他社會百般の道徳、人間生活、修養上の問題のひとつとして備はらぬはない。

故に信仰を積んで、生命の不死なる所以を體得し、幸福の生活を得るといふこと

も、結局は家庭訓育の力に俟たねばならぬ、家庭の改善は国家政策の出発点である。若し家庭の改善をなさずして社会の改良、国家の発展、人類個々の進化を希はんとするのには恰も木に依つて魚を求めやうとするものに等しいのである。

人間は學校からは出ない、學校は教育は授けるが、然し人間根本の生命にかんしては何ら力を盡す所がない、よき人物はよき家庭から出る、悪しき人物は悪しき家庭から出るのである。

人間何人か家庭の感化を受けないものがあらう、家庭の善悪は子孫の盛衰に影響するのは勿論、国家の消長に關係するのである、即ち家庭の善悪は個人と社会と國家とに對して重大なる意義を有するのである。

善き樹は善き實を結び、悪しき樹は悪しき實を結ぶ。

とキリストも言つた、家庭と人の關係も又然りである。

二 家庭の女

家庭に於て力を有するものは妻たり母たる女である、家庭の善悪は妻たり母たる女の善悪に依ると言つてもよい。

小兒は模倣性の盛なものである、夫は妻に化せられることが多い、即ち家庭に於ける子供と夫とは母と妻から知らずくのうちに感化を受ける、夫が一日の勞働の慰藉は妻である。

妻の善悪が如何に夫に影響を及ぼすかは考へるまでもない、妻が夫を慰藉するの努めを果さなかつたならば、夫の心はすさみ、夫の勞は癒されず、自然夫は社会的にも職業的にも面白くないことが多くできる、幸福は其所から破壊される、また子供の一日の師友は母である、母の一言一行がどれだけ子供に影響を與へるか、ハルベントは。

善長の母は、百人の學校教師に當る、母の家庭にあるや家庭中の人心を引き眼目を引く磁石である、世の行爲は小兒は二六時中模範としてこれに倣ひ生涯品行の基となる。

と述べた、ソクラテスは大哲學者であつたがあの妻サンチベは性極めて愚かで子に對しても不慈であつた、妻の不徳は埃及七年の飢饉よりも災厄大なりと言ふ俚諺もある、ソロモンは

辱を來らする女は夫をして其骨に腐れある如くならしむ、智惠ある女はその家を建て愚かなる女はおのれの手をもて之を毀つ、忠實なる夫は爪を以て正しき貨を蒐むるも、徳なき妻は箕を以ててれを空しきに歸す、美しくしき女のつゝしみなきは金の環の豚の鼻にある如し、相争ふ女に俱に家に居らんよりは屋根の隅にをるはよし、怒り争ひ女と共にをらんよりは野にゐるはよし、相争ふ女と共に家に居るは雨漏のする家に居るが如し。

と言つてる、婦徳の國家及び家庭に及ぼす影響は誰でもよく知つてゐるが、茲にそれを痛切れ言ひ現はしたのはナポレオンである、彼は「我をつくりしは我が母也」

と言つた、絶世の英雄ナポレオン、全歐をその手に席捲したナポレオン、その絶大なナポレオンは實に其の母が作つたのであると、彼自ら稱してゐる、ある時ナポレオンは戦後國民教育の方針を苦慮してゐた、そして偶々、カムパン夫人にその意見をきくと、夫人は言下に

「母也」

と言つた、ナポレオンは深く此の言に感じた、この一語のうちに千言萬語の教訓があると言ふ賞美した。

然り母である、人間を作り、國家を改造し、幸福を齎らす最大の功績はよき母の専らにすべきものである。

三 母の感化

ある婦人が三歳になる子供を連れて行つてある有名な教師に

「この子は今年で三歳です、是から如何教育したらばいゝでせうか

と、訊いた、ところがその教師は、

「もう遅い、三つまでが人間教育の最も大切な時である、あなたは大切な教育の時機を失つた」

と、言つたとの事である。

すべて小兒は五歳までに記憶する分量は六歳より十二歳まで小學校で習得するよりは多いとの事である、ある家で三つになる女の子がダンスの真似をしたので父親は不審に思つて、

「いつダンスを見たのか」

と、聞くと、乳母は

「いゝえ一度もダンスなどお見せ申したことはありません」

「では何故こんな真似をするのか」

と、きいた、其所でいろ／＼考へて見ると、此の女の子が二つの時に、女中が踊の真似をして子供を喜ばせたことがあつたが、その時のことを覚えてゐたことが分つた。

二つ位で何にも分らない様でも覺束なき記憶が他日口が聞け手が動くやうになると其の記憶を實現するのである。

ボンペーには鸚哥といふ鳥が澤山ゐるが、その籠の中に飼育するものは、多くは卵を室内で母鳥に孵化せしめ、漸やく成長して未だ其の聲を發せざるに先立ち暗室に於て、幾十百回となくオハヨー、イラツシヤイなどいふ言葉を繰りかへして聞かせると、いよく成長して先づ第一に囀づるのは、オハヨー、イラツシヤイの聲で

あるといふ、然らば即ち小児がすでに四五歳になれば見聞したことは善にまれ悪にまれ、悉く記憶から現はれる。

教育學の大家ベスタロツチは其妻アンナと共にある時ヤコヴと云ふ子供をへれて散歩がてら豚の屠殺場を見たが、その翌朝ヤコヴが、いつもより餘り静かにしてゐるので母のアンナが

「ヤコヴ何をしてゐる」

と呼んだ、するとヤコヴは

「坊はヤコヴではありません、豚殺です」

と答へた、即ち新らしく目に映じたることが翌朝になつて、木片などを豚に擬して餘念なく自らを屠殺場の主人たる想像をめぐらしつゝあつたのである、是に類似した話は東西共に少くはない。

孟母三遷のことの如きは母たる婦人のよく／＼考へねばならぬことである、支那

の孟子の母親は始め墓地の近邊に住んでゐたが、其子孟子が頻りに葬禮の眞似をするので、斯やうな土地は子供の教育には不適當なりとして直ちに市内へ轉じた。

すると孟子は今度は商人の眞似をして遊んだ、孟母は此所も尙ほ子供の教育には不適當であるとして直ちに學校のそばへ移轉した、それから孟子の行動は急に上品になつたとの事である、これを孟母三遷の教といふのである。

此の三遷の教に就て考へねばならぬことは、子供が他人又は近隣のことすら速やかに眞似るならば、生れ落ちてから乳を呑むところより常住、坐臥目撃する母親の言行に強き感化を受けるのは申すまでもない、實に家庭の子女に及ぼす勢力の如何に強きかを考へて母たるものは大に三思せねばならぬ、家庭教育の主權は全く母親に存するのであるから、婦人位家庭に於て責任の大なるものはない。

父親が賢者であつても、母親が愚かであれば十中八九までは、その家庭は不規則不經濟にして、其子女も亦不規則不經濟である。

父親が不十分で、つても母親が賢ければ其家庭は整頓して経済的であり、其子女も必ず規律あり勉強家となるのである。

故に、國家の盛衰は大に婦人——ことに母親の智徳に關係するのである、ソロモンは曰く、

誰か賢き女を見出すを得ん、其價は眞珠よりも貴し其夫の心は彼を頼み其産業は乏しくならじ、かれが存ふる間は其夫に善事をなして悪しきことをなさず、彼は羊の毛と麻とを求め喜びて手づから働き商人の如く遠き國より其糧を運び夜の明ぬ先に起きて其家人に糧を與へその婢女に日用の分を與ふ、かれ手をなやめる者に伸ぶ、かれは家の人のために白妙の雪をも恐れずして働き、其家人にかれ紅の衣をきす、かれは己れのためにも美はしき褥を造り細布の衣を製して、之を賣り帯を作つて商人に與ふ、かれは力と富貴とを衣とし、かつ後の日を笑ふ、かれは口を開きて智慧を述べ、仁愛の教へ其舌にあり、彼は其家の

ことを鑒み怠り糧を食はず、其子等は起て彼を祝す、其夫も亦彼をほめて言ふ賢くことをなす女子は多けれども汝はすべての女にまされり、艶麗は偽りなり美麗は呼吸の如し、思ふにエホバを畏るゝ女は賞められん、その手の操作の果を之に與へ、その行爲によつてこれを町の門にほめよ。

四 母親と子供

家庭に於ける母の責任の重、かつ大なることを思へば、他日一度は必ず母とならねばならぬところの女は、死に到るまで日々に智識を増し心を磨くことに注意せねばならぬ。

智識を増し心を磨くには何うしたらよいかと言へば、それはよき書物を読み、よき教を聞くのが一番適切である。

子供に大切な教育時期は四歳までである、若し生れて五歳まで賢良なる母に訓育

せられたものは如何なる境遇になつても決して墮落はせぬものである。若し不幸にして一旦墮落しても、いつかは母の訓育を回想して必ず悔改するものである。斯やうな譯であつて家庭の訓育の必要大切なことは、古へより是を論じた書物も少くはない。支那に於て漢の劉向と云ふ人が『烈女傳』を書いたが、其の書の中には其子未だ生れざる時、即ち胎教として懷妊當時より教育に心を注ぐべきことが書いてある。

其一例を述べれば、古へは婦人子を妊めば、寝ぬるに側せず、坐するに偏せず、立つに蹕せず、邪味を食はず、割正しからざれば食はず、席正しからざれば坐せず、目に邪色を見ず耳に淫聲をきかず、夜は即ち替に詩を誦して正事を言はしむ、斯くの如き子は形容端正にして才人にすぐと記してある。

是を尙くはしく分りやすく言へば、即ち婦人が懷妊すれば、寐るに片寐をせず、坐するに横坐りをせず、かつ片足立をせぬやう、その食物も平生喰ひ馴れしものを

とり、割目正しからずと言つて異様の調理法のもの食はず、坐蒲團など曲つたものは席正しからざれば坐せず、目には異様のもの殺伐的陋劣なもの、奇異なるものは見ないやうにし、不真面目な談話や猥褻な話は淫聲をきかずとしてある、斯やうなことは世界各国ともに教えてゐるところであつて、片足立すると跛の子が生れるとか、火事を見ると痣のある子ができるとか言ふのも、實は懷妊中の輕躁の舉動を戒しめ進退動作に注意せしめるためであつて、一がい迷信として退くる譯には行かないのである。

既に生れてからも左様である、子供は言葉を以て教へることは實行せぬが、行つて見せることはすぐに真似るものである。

此の點は母たるもの、餘程注意せねばならぬところである、ある家の若き婦人が毎朝甲斐々々しく入口の前の掃除をしたが、其の家の三歳位の子供が塵取へ塵をはき込み、箒でおさへながら塵箱へ入れる真似をしてゐた。

その子供に掃除は斯うするものだと言ふ口で教へてもそれが實行できるものではないが、見やう見真似ならばすぐに覺えるのである。

フレーベルの書いた『人の教』と云ふ書物の中には、日傭取の子で二歳になるかならぬかの子供が、父の馬を引いてゐる子供は落ちつきはらつて、馬の前へ歩んでゐる、折々振りかへつて馬を見るが、現然たる馬士である、子供は自分が手綱をもつてゆけば馬は後から来るものだと思つてゐるのだ、父が途中で人に逢つて立話をしてゐると馬も留まつた、子供は馬が歩かなくなつたと思つて一生懸命に手綱を引いたと云ふ話を書いてある。

五 文化と婦人

子供は何時頃から家庭の感化を受けるかと言ふと、まづ子供の五感の發達の順序から考へると、ダービン其他學者の説に依れば小兒が生れて九日目には蠟燭の火を

ちつと見詰め、四十九日目には美はしい糸の房を見せるときには手足の運動をまづたく中止して熱心に見たと云ふ。

即ち小兒は第一に視力が發達する、四十九日目には手足を止めて房系を見つめたる如く、母親の大小各種の行動が蠟燭の火よりも五色の糸よりも、尙ほめづらしく目にうつるのである。

母親の性質の良否が其の子の運命に關係することの如何に大なるかは是によつて見るも明白である。

次には視覚ばかりでなく、聯想的智能及び實行的慾望が開發する、茲に面白い話がある、ある人が病氣で寝てゐると、醫者がきて診察したが、まだ昔のことで聽診器も舊式のものであつた、即ち小さい喇叭形の機械の一方を病人の胸へあて、心臓の肺の音をきくのである、丁度その病人の子の一年四ヶ月ばかり経つたのが母の膝にあつて、ちつと醫者のすることを見てゐた、兩三日の後、子供は臺所から吹竹

を持つて来て、父の夜具をまくつて、その吹竹を胸にあて、一同を笑はせた、即ち見たことを實行したのである。

然して最も多く見られるのは母親の行爲である、母親たるものゝ氣をつけねばならぬのは此の點である。

ダービンの研究に依ると、子供の聽覺は七十五日目位から生ずる者だと云ふ。テノンと云ふ學者の實驗に依つてもやはり七十五日頃である、始めは見るばかりであるが後には聽くことを調和して、見たことは必ず行はんとし、聞いたことは必ず口はんとするのである。

然してその言行の模範たるべきは母である、母の智徳が子供の智徳に影響するところは實に重大である。

眞にその子の幸福を希ふならば、母たるものは大に言行を謹しみ、自己の智徳を練磨せねばならぬ。

斯くの如く目と耳の發達はいよゝゝ子供の智識の發達を促すのである、開發の芽生えである。

母親はよろしくその開發を促すと共に發達を妨げざるやうせねばならぬ、故に禮記内則篇にも、

凡そ子を生むや諸母と可なるものとの内、必ず其の性質の寛裕慈愛恭儉にして言葉少きものを撰んで子の傳となすべし。

と書いてある、悪しき模範の前には如何に立派な教訓もその効力はない、實に模範は實行上の教訓であつて口舌にて教へ能はざること教へるのである、故に行爲と教訓とが相反してゐる場合には教訓が無効になるばかりでなく、子供は却つて反感を起すものである。

父母の口に言ふところと身に行ふことが相反するときは、小兒を傷つくることは大なるものである、エマーソンが

盗める鷺を袖にして信實徳行のことを説教するも其の教師は一錢の價値をも有せず。

と述べた如く口舌のみの教訓は何の役にも立たぬのである。

子供訓育の責任を母に求めるのはけだし大なる理由がある。母の慈愛は天理人情の必然なるもので、最も現はれて見易きものであり、其子に沾ひ感ずるもの、人の始めて世に出でた時から生涯これに伴ふのである。

善き母の徳善の感化は、その勢の大なること小兒一生の末途にまで達し久しうして已まざるものであつて、人生の海にはじめて舟を浮べ岸をはなるゝや多少の苦勞多少の憂愁多少の誘惑に逢ふことは人々の必ず免かれざる所であるが、此の時に當り幼年時代の母の感化はその人の梶である、羅針盤であり力であり生命である。人は小兒の時其母から種を受け根を生じた純正善良の意志は次第に成長發育して善行正義となつて一生已むことはない、母既に世を去つて一物をも残さずと雖ども

その慈愛その教訓は其の子の記念として永久に存するのである。

エマーソンはその著述した『品行論』に説いて曰く、

國の開明は善き婦人の感化なり、故に婦徳の長短を見て國の開明の度を知るに足れり。

と、即ち一國の文化が婦人の力に關係することの如何に大なるかはこの一語によつても知られる。

家庭を左右する婦人の力は、やがて一國文化の程度を上下し得るのである、婦人は大に自重せねばならぬ。

六 家庭と宗教

獨逸のサルツマンと云ふ教育の大家が蟹の横這ひと云ふことを教へてゐる、親蟹がその子に向つて、

『お前たちは決して横に這つてはならぬ、爾後眞すぐに歩まねばならぬ』
と、教へた、親蟹のつもりでは自分が横這ひするのがいかに醜くいと思ひ、自
分の子供はまつすぐに歩かせやうと思つて教へたのであらう、然し口には斯う教へ
ても依然親蟹は横這ひをやめなかつたので、子蟹もやつぱり横這ひをしてゐたと云
ふ。

これは一場の童話であるが、人間もまた斯くの如しである、いかに口で善良なこ
とを教へても、その行爲が悪かつたならば決して子供は善い方には遷らぬ。

小兒の見ることに、聞くことが、發達する時に際して注意すべきことは澤山ある、
然し誰でも陥りやすい弊を言へば、それは子供の眞似をして片言を言ふことである
小兒は正確に言ひたいのであるが舌がまわらぬのである。

その眞似をして片言を言へばいつまで経つても正確には言はれぬ、小兒のために
不親切なことである。

強いて小兒に正確な言葉を教へなくもいゝが、自分たちは日常つとめて正確な言
葉を使用せねばならぬ。

それから、行爲であるが、善良なる行爲をとらねばならぬのは勿論だが、わけて
敬虔の模範を示さねばならぬ。

小兒は父母兄弟姉妹朋友と交る間に自己と自己以外のすべての者と一致結合せし
むる原動力たる共通の感情を有し、即ち人は個々孤立の如くであるが、感情は決し
て孤立のものではなく、共通一致の神聖あることを感ずるのである、即ち宗教心で
ある。

楽しい時にも、淋しきときにも、苦しき時にも、信賴するに足る可きものである
事を、行爲を以て子供に示すのである。

たとへば母親が子供を寐かさうとするとき小説や新聞を読みながら乳を與へるも
のもあるが是は避けたがよい。

敬虔なる母親は静かに神佛を仰いでひたすら其の子の保護と幸福を祈らねばならないのである。

またその兒兒が目をさまし楽しさうに笑つてゐる場合でも神佛が小兒に安息を與へ力を與へ玉ふことを感謝せねばならぬ。

此の如き敬虔なる母親の感情は自然しらすくの間小兒に感化を及ぼして、小兒の信仰心、宗教心の芽生えとなるのである。生命は生れたときからである、これを生かすも殺すも母親の心一つである。

小兒に敬虔の念を培かはざるは小兒の手より寶を奪ふに等しいものである、人間の生涯の幸福は小兒時代のこの敬虔の心を培養の如何に存するのである。

第十一章 人格論

一 人格の要素

人間の幸福は家庭から始まる、小兒時代家庭に於ける母の感化から起る、わが子の一生を幸福に導き得る母は、もちろん勝れたる人格の持主でなければならぬ、然らば即ち人格とは何であるか。

人格とは何であるか、ちよつと定義を下し難い、平たく言へば言語行爲の上に、天然の美質が純潔に發達した有様を言ふのである。

人には完全なものはない、長所美質があると共に又何等かの缺點短所がある、人に完全を求むることはむづかしい、故に人格ある人とは完全な人を言ふのではなくして、缺點短所の少ない人を言ふのである、否、むしろ、長所美質が短所缺點に打

ち勝つてゐる人のことを指して言ふ可きである。

故に人格を修養する一方には成る可く短所缺點を補充する心がけがなければならぬ、然して同時に長所美質の發展を期することが必要である、孔子の所謂

心の欲する所に従へども矩を踰えず

と言ふのが修養の極致であつて、人格の到達點である。

凡そ人が社會から尊敬を受けるのは大體二つの方面から觀察することが出来る、一つは智識若くは財産を有する事が其人の長所となつて尊敬を受け、次には性質が言語行爲の上に美しく表現される人、即ち人格あるために尊敬を受ける、一は外部的の尊敬で他は内面的精神的である。

どちらがより尊といかと言へば勿論後者である、智識はあつても悪いことをする者はある、財産はあつても愚かな人が多い、左様なものは眞に尊敬を受くるには足らぬ。

人間の尊ぶべきは性情の美なることである、人格ある人は時と場所を問はず、萬人から一様に尊信を受けるが、財産智識ある者は一時的にある一部分の人から尊敬されるに過ぎない。

言忠信仰篤敬なれば蠻貊の邦と言へども行はれん。

と孔子の説いたのは實に人格者の徳を言つたものである、故に人格とは自然の美質の發揮したものと解釋してよい、つくろひ飾ることのない天真爛漫たる人に於て見られる。

もとより學問も人間には必要であり、財産もあつて悪いことはないが、然しながら要するに人格と云ふものは學問とか財産とかいふもの、外に現はれるものであつて、即ち赤裸々に、天真爛漫として飾る所なく求むる所なくして、然もそれが人情の自然に流露したところに力があるのであると思ふ、だから人格は人間に自然に備はつたものを、修養の力に依つてある程度まで發達させたものだと言ひ得られる。

二 價を求むる人

學問も財産も人格の一要素には違ひないがその全部ではない、心のうちに何等挾むところのないさつぱりと竹を割つたやうな人は人格者として勢力を得る、求むるところがあつて斯やうな舉動をするものは人から何となく厭氣がさゝれるものである。

智識あり學問ある者が苟くも求むる所があつて、人にほめられたいとか、其のために利益を得たいとか云ふやうな考へでは、そこに卑しい所が見えて本當の人格とは言はれない。

ある貴族が音楽教師を抱えやうと思つて甲乙丙三人の専門家をその家に招待した然しその三人とも始めから何の用で招待されたかを知らなかつたばかりでなく、三人とも別々の部屋にお互に自分一人が呼ばれたつもりでゐた、實際その貴族が何の

ために自分を招待したかは三人ともに知らなかつた。

何れも何の用かしらんと思つてゐるうちに、やがてピアノの音が聞えた、甲が呼ばれて引いてゐるのである。

乙も丙も耳を傾けてきいてゐたが、その歌の聲で甲がやつてゐることが分つた、その内に甲は用をすまして歸つた、乙にも丙にも顔を合せなかつた。

次は乙が呼ばれた、乙は大がいに此の貴族が唄はしたり弾かしたりして召抱えるのかも知れないと思つたから、甲より上手にやらうと思つて一生懸命にやつた、三番目の丙もまた同じやうに二人に負けない氣になつてやつた、甲は左様なことは知らなかつたから何の氣なしにピアノを奏でもし、歌ひもした。

その結果は何うであつたかと云ふと、その貴族は『何れも上手であつた、然し甲は求むるところのないさつぱりした歌ひ方である、乙丙ともに何となく求むる所があつて面白くない』と言つて、何の氣なしにやつた甲が召し抱えられることになつ

て一生懸命にやつた乙と丙とはつまり試験に落第したのであつた。

是に依つて考へて見ても、われ／＼は己れの技量よりは高價に買つて貰はふとする卑しい考へがある時は、思ひ内にあれば色外に顯はるゝものであつて、往々にして人から嫌忌される。

ハイカラとか何とか言はれる人物は學問も出來風采も申分はないのであるが、然も何となく人から厭がられるのは、早く人から知られたい、早く自分の價値を見て貰ひたいと言つて餘りに求めすぎるから反つて人から厭がられる、われ／＼はそんなにあせらなくも、自分に人に知られ、人に尊敬せられるだけの價値があるならば求めずとも何時かは人に知られるのである、人を押しのけて出やうと云ふやうなことは要らぬ、無邪氣にして求むることのない時には、其人格は自然に向上してその價値を増すものである。

ある國で、某大強國と戦つて大に勝利を得た、其の紀念に海戦の繪を描かせて美術館に藏つて置くことにしたが、さて其の繪を誰に書かせたらよからうと云ふことになると、その國の畫家は何れも自分の名譽になる事であるから、各方面から運動をして來て、さすがに政府でもその人選に困つた。

そこでその畫家のある所に集めて晚餐會を催し、その席上で席畫をかゝしめ、多數の人々の鑑定によつて一人を選定しやうと云ふことになつた。

三 價を待つ人

所が此所にAと云ふ繪師があつた、腕は可成すぐれてゐたが、すこしも書かない書かないから何時でも貧乏暮しをしてゐる、貧乏をしても氣に入らない繪は書かないと威張つてゐた。

政府では此の男も晚餐會へ呼ぶことになつたが、そんな風の男だから何所にもゐるか分らない、結局警察で調べて漸やく分つた。

汚ないボロ／＼の衣服をきて立派な服装をした役人や同じ畫家の中へ来てAは少しも恐るゝ色もなく繪をかいた。

他の人も勿論かいた、然し他の人々の繪はわれこそ政府の選に預からう、人に知られたいと云ふ氣持で書いた、Aは何面倒くさいと云ふ氣持でかいた、その心持ちが大變ちがつてゐる。

けれども選に入つたのは誰の繪であつたかといふと、いゝ加減にかいたAであつた、他の人は求むる所があつただけに繪に力がなかつた、Aは平氣であつたから自然その天真が流露して立派な繪が書けたのである。

されば我々は餘り自らの智能を早く人に賣つて己れの地位を得やうとか、或は名望を得やうとか言ふことになる、却つて幾分か其人格を害するかと思ふ、孔子は沾らん哉沾らん哉われは價を待つものなり。

と言つたが自分から價を求むるとは言はなかつた、其所に面白い眞理の一片が窺

はれる。

價を求むると云ふことになる、動もすればハイカラ的になつて人から厭がられる、賣る可き覺悟を以て社會人道のために己の學んだことを實行して、己れをも社會をも益すると云ふ十分の人格を備へて眞面目に其の學問知識を應用すると云ふことが大事である。

即ちわれ／＼は價を待つと云ふことが大切であつて、價を求むると云ふやうになつては人格をいく分傷けることになるのではないかと思ふ、さりながら又、才力も智能も、人に劣つてゐると思つて引込み思案、臆病であつては駄目である、自分から求めるのは悪い、然し招かれたならば喜んで進んで應ずることは必要である、今日の青年は引込み思案ではいけない、進むべき場合に進むべきことも考へて置かねばならぬ。

四 人格の修養

人格とは學術道德宗教の修養を俟たずして、先天的美質を有する人を言ふのである。

斯やうな美質を有する人は求めずして他人の親愛敬慕を招くのである、無學の百姓でも、金殿の豪商でも、やはり是は同じである。

以上述べたところは人格の勢力に就ての一般である、今日に於て學問もなく宗教も信ぜぬ人であつて立派な人格者も澤山あるが、斯くの如き人々には道德又は宗教の修養は不必要であるかと言ふと、それは決して斷言できぬ、いかに自然的天性の美質を備へてゐる人であつても、その人格を玉成し、ますます其の眞價を發揮するにはやはり宗教や道德の修養は緊切必要なことである、子張があるときその師孔子にむかつて、

「美人とは如何なる人を言ふか」

と訊いた、孔子即ち答へて、

「迹を踐まず亦室に入らず」

と言つたのである。

此の意味は甚だ面白い、釋迦でも基督でも、乃至は孔子でも、何れも古人のあとを踏んだ人ではない。

即ち自分自からの美質を玉成して聖人賢人と言はれるやうになつたのである、然し、自然の美質を玉成したのは如何した方法に依つたか、即ち修養したからである、天性の人格美をます／＼光輝あらしむ可く努力したからである、普通の人もまた斯くの如くあらねばならぬ。

普通の人でも天性の氣質はつとめずして不義不正をせぬ者もある、然し左様な人であつても人格の奥義に入ることは出来ぬ、玉磨かざれば光なしである、如何に性

質が美でもこれを土や泥と一所にまみれた儘捨て、置いたのでは何の効用もない、磨きをかけるのである。

老子の道徳篇第十九章に素を貼し樸を抱くと云ふ言がある、素とは白であるが白とは違ふ、白の字は人工的の白でたとへば白ペンキ、白チヨークの類である、素の字はもと生糸より出でたる語であつて人工を加へずして自然に白いものを言ふのである。

又樸とは山林より伐り出した儘の材木であつて是又人工を加へないのである、この天然白い糸、天然の良材は職工の力を加へねば用ふることは出来ない、加工して始めて貴く價值あるものとなるのである、少くとも加工に依つてその價值を高むるものである、人間の修養とは斯やうなことを言ふのである、ある英雄は

天性の豪勇は固より貴きものである、然しながら屢々戦場に出て經驗を積んだ普通の人に及ばぬことが多いものである。

と言つた、眞に然りである、豊英雄のみならんやである、天性美質を有する人格者であつて、修養に依つてその人格に力を加へ價值を大にすることは緊切必要なことであると言つてよい。

フランクリンは天性美質を有してゐた人格者であつたが、尙ほ自らを徳に進ませ、可く節制、沈黙、秩序、確志、節儉、勤勉、誠實、正義、中庸、清潔、寧靜、貞潔、謙遜の十三條を理想として其の完きに至らんと努め、かつ孜孜として終生修養を怠らなかつたのである。

五 人格と健康

如何に天性の人格者でも、修養することなくしてはその美質を完ふすることは出来ない、パウロは

わが希ふところの善はなさず、わが希はざる所の不善をなす、あゝ我は弱きも

のなり。

と言つてゐる、パウロの如き人格者でさへもその天性の美質を保つどころではない、却つてその人格を傷つけるやうな破目になる程人間、弱いのである、ヤコブはわれ等はみな過ちするものなり、されど人若し言ひ過誤なくばこれ至き人にして全體に轡を置き得たり。

と言つてる、然り人間はみな過ちをするものである、此の誤過を少からしめるのは唯それ修養があるのみである、修養の必要なことは是に依つて見ても分る、然らば修養とは何か。

所謂修養と言ふことに就ては、更に後章に説くが、此所には人格の修養と共に身體の鍛練の必要をちよつと述べて見たいと思ふ。

即ち健全なる精神は健全なる身體に宿ると云ふ格言がある如く、如何なる人格者も、如何なる道徳家でも、身體が健全でなければ、折角の人格、折角の道徳も、何

等用を爲さぬものである、身體を鍛練することは、その人格を完うするに缺くべからざる方法の一つである。

要するに體力訓練と云ふことは、われ／＼が修養によつて内部に積みたる道徳上智識上、精神上の諸徳を外部に發して其の効果を完うするために、膽力及び體力の實質を備ふ可く努力する行爲である。

たとへば佛敎に教ける僧侶が、佛敎を學ぶに先立つて、本堂庫裡庭園の灑掃より水を汲み米を磨ぎ樹を伐り薪を割る等の鄙事に従事せしむる、膠を折るの寒夜も金を鎔かすの炎天もこれを厭つてゐられぬ。

即ち寒暑に耐え風土氣候の變遷に抵抗し、或は樹下石上に一夜の夢を結ぶ事もあり、或は又水を飲んで一時の飢餓を凌ぐこともあり、然してよく之に耐えるのは膽力體力の訓練に依るのである。

人は食ふために生きるのか

それとも生きるために食ふのか。

何のために生きるのか。

老人となつて死する爲であるか。

その疑問は『生命論』の章にも説いたから此所には詳述しないが、われ／＼は徒らに長命することが目的ではない、われ／＼は人間としての職分を盡さんが爲めに生きるものである。

その活動の基は元氣の旺盛なることである、元氣の旺盛は體力の強壯に待たねばならぬ。

成功するもしないも體力ひとつである、人間としての職分をいかに有力に盡したいと思つても、身體の健康が思ふやうでない者は儘ならぬものである。

健康を保つために運動は必要である、然し運動と言つたところで野球をやり庭球に熱中するの謂ではない、適當なる運動である。

規律を保つことも必要である、食事を慎しむことも必要である、朝起きる必要である、それと反對に朝寢夜ふかし、暴飲暴食、不規律なる行動等は避けねばならぬ運動が必要だからと言ふて體力に相當せぬ激烈な運動は却つて健康を損ふものであることも忘れてはならぬ。

運動は、たゞに少年時代のみではない、學生時代にのみ必要なのではない、常坐臥必要である。

老若男女を問はずその體力に應じたる運動を試みることは必要である。

社會員も運動すべし、官吏も運動すべし、獨身者は勿論、妻帯者は夫妻心を合せて適當に運動すべし、運動を嫌ふのは健康を嫌ふのと同じである。

世に健康を欲せざるものはあるまい、然し自然の間にその行動が健康を嫌ふかに見えるものがある、不攝生者、暴飲暴食者、朝寢夜ふかし、不規律なるものがそれである。

運動を適當にすれば黒パンも旨い、運動の足らぬものは旨きを食して甘からざるものである。

休んでゐる馬に多量の麥を食はせると馬糞から麥が生える、人間はそのやうな食物の食ひ方をしてはならぬ。

人間活動の根本は元氣である、元氣は健康の産物である。

第十二章 修養論

一 人間の性は善

時代の變遷につれて髪かみの形かたちは種々に變つて來るが、人間の顔かほの形かたちには變化がないと同じやうに、思想しきうに多少の變化はあつても、その根本たる精神修養せいしんしうやうの土臺どたいには何の變化はないと思ふ。

新しい言葉が用ひられ、新しい學問は發見されても、人間の精神修養せいしんしうやうの土臺どたい、人間の道みちは永久不變であらねばならぬ。

三千年の往昔より人間の行く可き道みちは決つてゐる、それが精神修養せいしんしうやうの根本こんぽんをなすものである、所謂人間の正道である。

然しながら人間は正道を行く者にも、時折變ときわりの訪おもてれを避けることは出來ない、た

とへば、婦人の歩むべき道は、一家の主婦となつて家を治めることが主であるとしても、時には種々の故障のために生涯獨身で暮さねばならぬ人もあれば、早く未亡人となつて一人で過さねばならぬ人もある、其他種々の變がある、けれども、要するに先づ正道を知つて次に變に應ずると云ふのが順序である、正道を悟つて變に應ずる心掛けを育て、行くのが即ち修養ではあるまいか、ある人の言葉に

一心は則ち霜をふらし城を落し金石貫く可し僞妄の人の如き形骸徒らに備はり精神遂に亡ぶ。

と云ふのがある、人間の正道を歩むものにとつては、一心は不屈の武器である、人間の一心は非常に強い、夏でも霜をふらすことが出来る、直接に霜と云ふが必ずしも霜が降るのではないが、昔の口傳に時の宰相の政治が悪ければ、時とすると夏霜が降るといふてゐる。

天地間の原則は人道の上にも眞を現はすことを説いたもので、その眞ならぬ悪政

治が行はれる時は、天地も又原則を變じて夏霜が降ると云ふので、人の心を立場として説明すると、眞心さへあれば人を感動させる、眞心でさへすれば何事も透らぬことはなく、もし降れと念すれば夏霜を降らすことも出来やうと云ふのである。

人間が一軒の家を治めて行く上に於ても、國の政治に係り合ふことに於ても、場合こそ異なれ、その根本の道には變化はない、一心をもつて人道を渡らねばならぬ若し僞妄の人、僞りを言つたり表面を飾つたりする者は、その形骸は備はつてゐるが其身を主宰してゐる精神が既に亡びてゐる。

人間の顔はその心を映すものである、泥棒は何となく盗みをするやうに見え、悪人は悪相を備へてゐる。

然し如何なる瘳猛な悪人であつても自分一人の時は羞恥を感じるものである、人間の性は善である、キリストが十字架についた時、盗みをして捕へられたものがあつたが、基督が罪なくして十字架についたのを見ると飄然として悔悟し、

「此人は罪なくして十字架についた、然も何の天地を怨むところもない、如何に偉大なる人であらうか」

と思つた、そして基督の方をむいて

「主よ御國に至らん日われを思ひ玉へ」

と言つた、基督はその心を褒めて

「今日汝は救はるゝことを得たり」

と言つた、今日汝は救はれるのである、人間の性は善である、今日それに氣がついて過去を顧みる者は幸ひである、明日と言はず、今日直ちに悔悟せねばならぬ。

二 修養の第一歩

人間が精神修養をせねばならぬと云ふことは、元來人間の性は善であるが惡の誘惑に負け易い程弱くして且つ缺點を有するからである。

人間の心が緩んでゐるとすぐ誘惑の手がつけ込む、故によく此の缺點弱所を知らなければならぬ。

修養の第一歩は實に自分の缺點を知ることである、缺點を知ると同時にその長所も知ることである、即ち己れ自身を知ることである、長所はこれを發達せしめ、短所缺點はこれを改善しなければならぬ、それが修養である。

然るに人間は自惚が多い、自分の長所を知ることが容易であるが、その短所缺點を知ることは至難である、孔子も

已まんなかな、われ未だよく其過を見て内に同じ認むる者を見ざる也。
と言つて嘆息した。

然し自己を知ることの適當な分量は此世に於て人らしからんと望み、又人らしいことを爲さんと欲する人には必要である、又格別自己信頼を形成するにはもつとも緊要なことの一つである。

フレデリック・バースはかつて若い友人に

御身は御身が爲し能ふことを餘りによく知る、併し御身が爲し能はざる事を知らる迄には御身は肝要なる何事をも爲し能はぬ、尙ほ又衷心平和をも得ることは出来ぬのである。

と言つたが、實際われ／＼は長所は餘りによく知つてゐるが、その短所に氣がつかぬ、否、長所だと思ふのみであつて、それが實際長所であるか否かは判明してはゐないのだ。

その癖短所は知りすぎる程知つてゐても是を改めやうとはせぬ、即ち知らぬものと同じ結論を得るに至るのである。

自分をもつと役に立つ人間である、もつと立派であると思つて安心してゐても、その缺點のために失敗する場合は多い、故にわれ／＼は先づその缺點を知つてそれを改めることに努力しなければならぬ。

氣の付かぬ一例を言へばわれ／＼が汽車に乗つて旅行して見ると、よく大きな荷物を澤山乗せて腰をかけた外の人の席がなくて困つてゐるのに平氣である者がある、又、集會所などの建物の中に讀書室などあるが若し其所に種々の新聞でもあれば全新聞を自分の膝において他の人が見たい／＼と言つて探してゐることを知らぬ者があつた。

斯やうな人々は、自分で自分の缺點をよく知つてゐると稱してゐるのである。

何人にも缺點はある、英國の歴史家トーマス・スカーライルは、決して彼の妻に不親切ではなかつた積りであつたが、後年になつてその妻が死亡してから考へて見ると如何にも自分が悪かつた、自分が著述に夢中になつてゐた時、妻の健康と幸福とを犠牲にした、彼は無愛想で不注意で、そして我儘の性分であつた、妻のいろ／＼な心盡しを酌みとつてやさしい言葉さへかけることに氣が付かなかつた、彼は妻が死去してから多年の間妻が最後に呼吸を引きとつた場所を通りかゝると、いつも脱帽

してその白頭を雨や風の中にさらして黙禮して通つた、全くとり返しのかぬ時分になつて斯くの如く悲しんで自分の身を苦しめた、さうして彼はしばらく

オ、若しも私が五分間、彼女に逢ひ、私がすべての間彼女を眞に愛して居つたことを彼女に知らせることが出来たならば……然し彼女は決してそれを知らなかつた。

と言つて嘆息したと云ふことである、兎角天才は多く禮儀などに無頓着である、それが爲に不遇に終り或は損をしたりする場合が多い、然し天才は普通の人より勝れてゐるから世間では凡夫にゆるすより以上に無禮をゆるしてゐる、カーライルも禮儀には頓着しなかつた。

ある時ヴィクトリア女王に謁見を仰せつけられたが立つて居るべき筈なのをいつもの調子で、その友人にでも逢つたつもりで御免下さいと言つて椅子に腰をかけたしまつた。

近侍の者が驚いて注意すると女王は笑つて、それには及ばないと言はれた、それは一面天才の缺點を語るものである、たとへ天才であつても英雄であつても、その短所たるべきものを凡人どもは真似てはならぬのである。

三 時の觀念

われは天賦の人格を完成して、人間としての職分を十分に盡さねばならぬ、それがわれは人間の目的である。

ある階級の人々に依つてはその目的理想は違ふかも知れぬが、ともかくも聰明なるべき人間は自分自らの完成を理想とせねばならぬ、自らを完成するのは修養である、修養に際限極度はない、孔子が

十室の邑必ず信丘が如きものあらん、丘の學を好むに如かざる也
と言つたのも、また

われ十有五にして學に志し三十にして立ち、四十にして惑はず五十にして天命を知り六十にして耳順ひ七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えずと言つたのは、修養が人間の全生涯に渡る可きことを説いたのである、何日何時でもよい、老年でもよい、少年結構である、思ひついた時人格の修養に志さすのである、早い遅いはない、然していつになつて終ると云ふこともない。

そも、人間の生きるといふことは時の問題である、我々は一朝にして偉人にはなれぬ、又、國家の進歩發達といふことも漸次に心掛けてなすべきで、一朝一夕のことではない、個人も國家も、時の觀念を忘れてはならぬ、經驗に經驗を重ね、修養に修養を積んで人格を完成しやうとするには、自分を助ける助手として時に信頼せねばならぬ。

今こそ逆境にあるけれども一生懸命働いて時がくれば順境になる、今は不幸であるが將來は幸福になる、斯う云ふ希望を時に繋いで生きることが必要である

フランスの王權が一時非常に衰へて僧侶の勢力が強くすべて僧侶の力を借りねば政治が行はれない時代があつた、これに憤慨して起つたのは、リシリユー、マザレン、コルベールの三人であつた。

マザレンはルイ十三世に仕へて十四世を傳育し王權を恢復し、次いでコルベールを拔擢してその遺業を嗣がしめたが、マザレンは

時と私との二つは、如何なるものにも抵抗することが出来る。と豪語したのである。

人生を美化するものは時である、時は人生の慰安である、時は經驗の食物であり智惠の靈魂である、時は青年の教師であり親友であり、又敵でもある、即ち時を善用するものは一步步進んで立派な人格に到達する、之を悪用するものは一步步滅亡に落ちて行く、時は金で買ふことの出來ぬ書物である、金で雇ふことの出來ぬ人間の助手である。

われ／＼が修養に依つて自分自からの人格を完成しやうとするには、先づ自分を
知ることが必要ではあるが、然し助けられると云ふことを軽く見てはならぬ、人間
の助手としての「時」はむしろ人間が自動的でなければ、その助手としての務めを満
足には盡して呉れぬ。

人間は時を自動的に利用すると共に、尙ほ他に自分を助く可きものを見つけて、
是に依つて修養の道程を歩まねばならぬ、時はレールである、われ／＼は乗るべき
列車を見つけないければならぬ、それは何であるか。

自分は既に賢い、他より學び他より助けられるには及ばぬと云ふ人は善良なるこ
とも偉大なることも爲し能はぬ人である。

昔、アレキサンドル大王が幾何學を勉強してゐる時に、餘りむづかしいので、
「何とか、もつと簡便に覺える工夫はあるまいか」
と、教師に聞いた、すると教師は

「たとへ殿下であつても、他の人々と同様學問の本街道を道中せねばならぬ、學問
の道には抜道、近路はありません」と答へたと云ふ。

いかさま、修養の道にも抜け道はゆるされぬ、如何に賢い人であつても踏むべき
道は踏まねばならぬ。

修養の道程としては書物であり、經驗ある先人の教訓であり、これ等の道を通つ
て一步步々完成の目的に歩つて行かねばならぬ、われ／＼は心も情も打ち明けて、
自分より賢き人の經驗を聞き、教訓を受け入れなければならぬのである、常に學
び、絶えず進歩し、次第に向上すべく心かけねばならぬ。

四 偉人の生涯

世の中の偉大なる人物は非常なる恩恵をわれ／＼の修養に與へる、詩人ロングフ

エラーはかつて

偉人の生涯はすべて吾人に忠告す、吾人はこれに依りて吾人の生涯を崇高にし能ふ

と言つてゐる、實際偉人の傑出した人格を見ると、それが一々吾人に忠告してゐるやうに感ぜられる。

偉人の生涯は吾人を勵獎する、奮起させる、吾人を美化して呉れる、吾人の向上進歩を助けて呉れるものは偉人の生涯が語る教訓である。

偉人は何れも勇氣ある人々である、決して失望落膽をしない、如何に困難に陥つても屈しない。

吾人は偉人の成功を見ては不可である、偉人の成功に達するまでの勤勉と努力とを見て、そこに何等かの教訓を發見せなければならぬ、佛蘭西のレフェブル元帥の友人が、元帥の成功を祝した、すると元帥は、

貴方は私を羨むが、それでは私はあなたに私が今日の地位を得たよりも、もつと割のいゝ方法を教へてあげませう、庭に下りて下さい、貴方の立つてゐる所から三十歩を隔てたところで鐵砲を二十發打ちます、そして私があなたを殺すことが出来なかつたならば私は貴方に私の所有のものを一切さしあげませう、其方が私を得たよりも大變樂なのである、私が今日の身分になるまでには數え切れない程鐵砲で打たれた、そして屢々三十歩内の所から狙はれたことを記憶して下さい。

と言つたと云ふ、斯やうに如何なる方面に於ても偉大なる人となるのは容易な努力ではない。

故に偉人の自叙傳や歴史を讀んで暗示、啓示を得ることは必要である、ミレーアソチエラスの畫は一枚十二萬五千弗である、然しその繪をかいた努力は百萬弗でも買ふことは出来ぬ偉大なる力である。

斯の如く人間は、過去に於ける偉人の努力を考へるがよい、偉人の生涯を考へるがよい、そこに吾人自身の人格を修養するに足る可き何等かの教訓を發見するに難くはない、偉人の傳記は漫然と讀むべきではない、又偉人の成功を盲目的に羨望すべきではない、これも尙ほ修養の一つであるとの覺悟のもとに見なければならぬ。

五 逆境の修養

順境にゐるときは、修養とか努力とか言つてゐる者もあるが、一旦逆境に立つと修養も努力も忘れて悲觀するものが多い、斯やうなうろたへた態度では修養を語ることは未だしである。

吾々は通例困難と云ふことを實際よりも大きく見てゐる弊がある、是より大きい困難はない。

こんな不幸な境遇はあるまいと言つて勇氣を失ひ落膽してしまふ者が世の中には

多い、然しながら物極まれば即ち通ず、夜の最も暗い時は、曉の始まる時である、釣瓶が二つあつた、甲は非常に悲しんで失望落膽してゐるので乙は慰さめ顔に、

「どうして君は左様に悲しいか」

「僕はもう生きてゐる氣はしない、毎日々々水は一ぱいにした、やれよかつたと思ふとすぐにもう空にされるのだから詰らなくつて仕方がないのさ」

と言ふと、乙は笑つて、

「さうか、君はそんな風に考へるかね、僕は又いくら空にして、又満され、空になつたかと思ふと又満たされるので、こんな面白いことはないと思つてゐる」

と、答へた、此の會話が何を意味してゐるかと言へば申す迄もない、物はその觀察の如何に依つては、逆境必ずしも悲觀すべきでなく、順境必ずしも樂觀すべきではない。

逆境はこれ人間を完成させやうとする天、試練である、天の重任を、さんとす

るや先づその身を苦しましむと云ふ格言も半面の眞理を語つてゐる、困難から善果を得ることは必要である、艱難汝を玉にすと言ふこともある、實際困難に遭遇して十分心身を鍛錬した人は、益々これを善用して人格の向上を計るものである。

プラトンは公平なる罰は神の最善なる恵みであると言つてゐる、ゲーテは如何なる困難も詩に化せられぬ者はないと言つてゐる、冬の寒冷のあとには春の暖かさが来る逆境こそは人間修養の最好時期である。

ある所に六十九歳になる老婆があつた、此の人は二十八年前にコレラを病んで、その後リウマチに罹り、手は縮み、足は跛で、腰はぬけ、全身不具であること十六年であつた、病床から更に動き出すことも出来ず、窓の外さへ見ることは出来なかつたが、彼女は少しも不平や悲しみを人に見せなかつたのみか、寧ろ感謝してゐる、と云ふのは僅かに一本の親指が動くのである、彼女は言つてゐる。

此の拇指があればこそ、三又の棒を用ひて聖書を開いて讀むことも出来、おか

げ様で神の恵を知つてゐるから少しも悲しいことも不平もない、むしろ楽しみである、死ぬべきものを生かして動かぬ指を一本だけでも動くやうにしたのは感謝すべき神の恵である、私は神様がこうしてまでも私の此世に居らるゝことを欲せられることを思ふと嬉しくてならない、然し、神様が御召しになれば何時でも満足して此世を去ります。

實に驚嘆すべき話ではないが、全身不随、拇指一本の自由を感謝してゐるのである、たとへ金はなくても、たとへ事業は失敗しても、五體の満足なのは感謝すべき神の恵ではないか、ロングフエラーは、

吾々は自分の死後に、時の砂の上に足跡をのこして行く、その足跡は後の世の人々が人生の大海を旅行し、失望したとき、破船した、孤獨の時、その慰さめとなり、案内者となり、鼓舞者となる。

と言つて、死ぬことをさへ感謝してゐる、逆境に修養せよ、それは人間何より

も有益なことである。

順境の修養は誰もする、逆境に感謝する程度の修養に吾人は到達せねばならぬ。

六 克己の修養

吾人は何人と言へども注意と自制とを要しない程、自然の儘で善良なる性情を持ち得ることは出来ぬ。

又、如何なる性情も適當に修養してこれを善良にすることの出来ぬ程不良のものはない。

唯容易に悪癖を矯正し得る人と、非常なる努力を有する人との差があるのみである、偉人は何れもその激情を驚く可き努力に依つて自制し、これを善用してゐる。

米國初代の大統領ワシントンはかつて一度も腹を立てたことがない、その言葉遣

ひなどは謹慎そのものであると言はれる程、それ程温和であつた、青年時代に友人と激論したことがある、ワシントンが餘り激烈な言を言つたので友人は怒つてワシントンを打ち倒した、その翌日友人はワシントンが決闘を申し込むだらうと思つて用意してゐた、然しワシントンは却つて和解を求めた。

友よ、過は自然である、過を改むるは榮譽である、余は昨日たしかに誤つたと信ずる、君は既にある満足を得た、若し君がそれで十分と考へるならば、茲に余の手がある、余等は親しい友人とならう。

と言つた。

二人はすぐに和解の握手をした。

ワシントンが過は自然であると言つたのは神ならぬ身の不思議ではない、然しこれを過と知つて改めるのは容易ではない。

故によく改めらるものは神より恵まれる、光榮だと言つたのであらう。

打ち倒された程の侮辱を受けたのである、たとへ非が自分にあつても負けてはゐられぬのが人情、いさぎよく過であると言ひ切つたのは驚く可き自制である、感に堪えない克己である。

英國のウエリントン公爵は、短氣な性質であつた、然し彼はいつもそれを抑制してゐた。

英國の首相、ダズレリトがある人から

「貴下は如何にしてヴィクトリア女王の恩顧を繼續するか」と聞かれて

「御承知の如く、余は決して反對せず、然して余は時々忘却すると、答へた。

ダズレリトの自制が反對せず、時々忘却させるのである、これは東洋にも例がある、孔子の伯夷叔齊舊惡を思はず恨これを以て希なりと言つたのがそれである。

伯夷叔齊はむしろ偏屈な人であるが人の舊惡を忘れてしまふので、人から怨まれなかつたと言ふのである。

これは自分自身を益すると共に他人をも利するものである、キリストが汝の敵を愛せよと言つたのも此の意味に外ならぬ。

舊惡を忘れ敵を愛すといふことは非常な克己自制が必要である、非常な努力が必要である、人間修養の極致は其所に到達せねばならぬ。

情は、吾人が人生といふ船を前進させる風である、**理性**はその進路を定める水先案内である。

風なくて船は進まぬ、水先案内なくて方向が定まらぬ、その風の方向を正しく巧みに善用するやうにせねばならぬ。

即ち情は發する儘にせず理性を以て善導し美化せねばならぬ、適宜に自制すると同時に善川するのが人格完成の一大要件である。

自制克己は徳性の根底である、吾人をして變動と激情に手綱を與へ、その發動する儘放任し盲動せしめたらば大變である。

その瞬間より吾人の道徳的自由は束縛され、意志はその自由を失ひ、人生の船は生活の流に翻弄されて一時的な最も強い欲望の奴隸となり悲境に沈まねばならぬ、フレデリックポーションは、

自己を統治することは、個人にとつて唯一の眞正なる自由である。と言つた。

我儘勝手は自由ではない、むしろ本能慾、性慾等に束縛せられ、これが奴隸となるのである。

アーサーヘルブスは
男子及び女子に於て、善といふものが多量に表示されるのは忍耐、持久、寛容が續く長さである。

思想
言
意
志
精

と言つた。

是等の諸徳が長く續くほど善の分量も多くなるとの意味である。シエクスピヤが人間は前後を注意する動物であると言つたのも、人間は前にあつたことを反省して後事を用心するもので、此の點が他の動物に優る所だと云ふのである。要するに人間に精神的修養がなければ萬物の靈長としての價値はない。

七 人間の完成

人間を墮落せしめる所のはき違つた自由や慾望のすべては、自尊、自鍊、自製の前進に對しては些末なものとなつて消失せねばならぬ。

上來記述したところの修養によつて情と心の純潔が習慣となつて、然して人格は貞操と徳と中庸との中に建設されて茲に人間が完成するのである。人間の完成は人間幸福の極致である。

人間の幸福が富にあり、或は権力にありと思はれてゐたのは誤りである。

富は失はれる、権力は衰へる、永遠に失はれざるものは人格である、生命であるのだ。

その人格を建設し、その生命をつかむことが、人間の本當の幸福であらねばならぬ。

しかも富める者、権力あるものは、その力をたのんで此の修養に到達することが出来ないのである。

哀れむべきは富人である、痛むべきは權人である。

貧しき者を讃めよ、賤しき者を讃えよ、幸福は彼等のものである。

英國の哲學者、ハーバート・スペンサーは次のやうにいつた。

理想的人間完成の一は自製の極致にある、衝動的でなく、逐次まづ頭に浮び出づる慾望に依つて彼方此方に驅らるゝことなく、自ら制し、自ら心の平均を失

はず、然して會議に集まつた諸感情の聯合決議に依つて統治されねばならぬ、此の感情の會議に於て各々行動は十分討議され、靜かに決定されねばならぬ、

これは教育、少くとも道德的教育が生まんとする努力である。即ち吾人の心の中にある諸の感情を集め、意志が是を統一し、適當に決定するのである。

故に青年等が、自製の習慣もなく、諸感情の統一もなく、衝動的に本能の儘に盲動するのは恰かも水泳の心得がなくて水の中へ飛び込むのと同じである、人間が家庭又は學校の利益を受けず、或は無訓練、無教育、無修養で成人したならば、人間の世界は如何に禍ひなるかな。

人生を超越する力終

大正拾壹年六月廿日印刷
大正拾壹年六月廿日發行

複製
不許

著者 內田 靜 衛

發行者 東京市本郷區湯島三組町八拾番地
石田 彦 三 郎

印刷者 東京市京橋區新富町三丁目二番地
小 泉 重 助

人生を超越する力

定價金貳圓

發行所

東京市本郷區湯島三組町
電話下谷一八九七番
振替東京壹五七八〇番

中央出版社

中央出版社圖書目錄

- 近 軼 哲學大集成 拾 版 村田豊秋著 定價四圓八拾錢 送料金廿七錢
- 美 學 概 論 新 版 柳井和助譯 定價參圓五拾錢 送料金拾八錢
- 美 の 哲 學 四 版 クロオチエ著 定價貳圓八拾錢 送料金拾八錢
- 森 林 生 活 再 版 トロロ著 定價貳圓五拾錢 送料金拾參錢
- 死 後 の 生 命 八 版 トルストイ著 定價金貳圓 送料金拾五錢
- 死 後 に 生 活 あり 再 版 デエムス著 定價金貳圓 送料金拾五錢
- 英國を 祝ふ 社 會 主 義 再 版 海軍少將 岩野直英著 定價金貳圓 送料金拾五錢

□ よく使はれる 外國語の字引 九版 文學士 高橋謙三著 定價壹圓八拾錢 送料 金拾參錢

□ 英語自由自在 十二版 文學士 前田太郎著 定價壹圓八拾錢 送料 金拾參錢

□ 手紙自由自在 十二版 文學士 上野古城著 定價壹圓五拾錢 送料 金拾五錢

□ 歐洲戰蹟めぐり 三版 湘南外史著 定價金貳圓廿錢 送料 金拾五錢

□ 英雄百傑 逸話の庫 六版 文學士 渡邊學人著 定價壹圓八拾錢 送料 金拾五錢

□ 日米開戰夢物語 拾版 城北隱士著 定價壹圓四拾錢 送料 金拾參錢

□ 名將 初陣回顧錄 三版 後藤矢峰著 定價壹圓八拾錢 送料 金拾五錢

□ 明治功臣 青少時代 面白い實話 三版 後藤矢峰著 定價壹圓八拾錢 送料 金拾五錢

103
108

終